第9回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

二〇一三年度第9回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただき、まことにありがとうございました。今回も五二一篇の作品が寄せられ、十代から八十歳代まで幅広い世代から寄せられたばかりでなく、アジアやヨーロッパ、南北アメリカと世界中から広く御応募をいただきました。また過去の重要な記録や、社会に対する鋭い批評、科学の最先端の記録も多く寄せられ、実にたくさんの優れた作品が集まった、ますます充実したコンテストとなりました。

例年の通りまず選考委員会予選担当による第一次・二次選考、続いて第三次選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、福岡哲司、都築隆広、五十嵐勉五人の選考委員によって討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞、佳作、入選作も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

明年いよいよ10回となるこのエッセイ賞は明年もほぼ同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って御応募ください。

なお授賞式は明年一月二十五日（土）大田区民プラザで行なわれる予定です。どうぞ御出席ください。

『文芸思潮』エッセイ賞

最優秀賞

「私の『チゴイネルワイゼン』」
鈴木綾子（徳島県小松島市）

「『今』を生きる」
島生樹郎（福島県郡山市）

優秀賞

「救急車は呼ばないで」
山田まさ子（東京都国立市）

「虐待」
松川琴美（兵庫県尼崎市）

「チャッピィ」
岡野みつる（富山県高岡市）

「きっと、帰ってくっと」
西島雅博（福島県いわき市）

「あの夜、僕たちは成し遂げた。」
サトウユウ（神奈川県茅ケ崎市）

「心を守るために」
浅井真理子（東京都文京区）

「空白の通知表」
城戸則人（広島県呉市）

「永久の別れ」
沼　俊（埼玉県上尾市）

奨励賞

「ももこの世界」
栗山恵久子（東京都府中市）

「砂の墓穴」
外山寛子（神奈川県横浜市）

「紫蘇染めの晒木綿」
寒川靖子（香川県丸亀市）

「譫妄」
白楊風子（兵庫県神戸市）

「杖、光る」
印南房吉（神奈川県横浜市）

「李の花」
武藤蓑子（東京都多摩市）

「インド移住まで―天の配剤―」
李耶シャンカール（インド・プリー市）

「白い傷跡」
宇佐美宏子（愛知県名古屋市）

「バードテーブルの砂」
高橋惟文（山形県山形市）

「改心」
上杉　辰（静岡県沼津市）

「名残りの夜空―カナダ人捕虜との交友―」
黒田直隆（東京都杉並区）

「真っ白な帆に風を孕んで」
南奈乃（奈良県吉野郡）

「THE 出産！」
犬伏久美子（千葉県千葉市）

「隠しごと」
川島英理沙（東京都豊島区）

「亡き母からの褒美」
桜井俊甫（大阪府堺市）

「事件」
川畑和嗣（北海道札幌市）

「千羽鶴」
中山典夫（兵庫県三田市）

「眩暈の芯」
下村きよ子（千葉県千葉市）

「ノー　マネー」
青柳いすず（茨城県つくばみらい市）

「いのしし考」
大森耀平（栃木県足利市）

「庭の奥」
吉田はるみ（兵庫県川西市）

「十一文半」
おおつかみずほ（福岡県嘉麻市）

「繭の部屋」
八束一臣（鳥取県境港市）

「人気者にしよう～冬瓜編～」
田仲浩子（神奈川県川崎市）

「竜胆の里」
池山弘徳（宮崎県都城市）

「病に癒された父子の絆」
板東洋三郎（神奈川県横浜市）

「母の手作り絵本」
天道静子（静岡県静岡市）

「雛人形」
横山緝子（東京都町田市）

「魂を捨てた父」
田賀せいし（北海道札幌市）

「春がはじまる」
ナカジマアユミ（東京都世田谷区）

科学記録特別賞

「ロシアに隕石が衝突した日―2013年2月15日03時20分（世界時）」
漆畑晨斗（静岡県駿東郡）

社会批評奨励賞

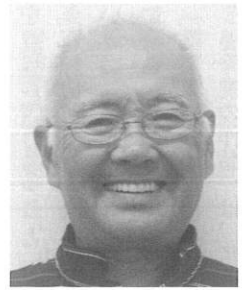
「スズメたちは西へ飛んでいった」
西本美彦（滋賀県大津市）

「ダーチャとベーシックインカム」
歌野　敬（長崎県南松浦郡）

佳作

「飲んべー顛末記」　エステル洋子（静岡県御殿場市）
「祇園囃子」　キム・キョンヒ（東京都世田谷区）
「人の一生」　ゴルビー長田（神奈川県横浜市）
「祠の記憶」　テンモンア（滋賀県大津市）
「紅無き落ち葉」　ならは　たかし（オランダ）
「『塞翁が馬』の背に揺られて」梶川洋一郎（広島県広島市）
「リストラ忘備録」　鑑照（大阪府大阪市）
「享年九十八」　桐ヶ谷忍（東京都江戸川区）
「鋭い牙はなくなった」　犬丸らん（東京都練馬区）
「たった一人のハイライト」山県大慈（京都府久世郡）
「わかりあえない」　山杷ぺこりの（栃木県日光市）
「生い立ちの記」　山本真美（京都府京都市）
「『ハセツネ』のこと」　小林理樹（東京都小金井市）
「結婚の資格」　長谷川智美（京都府京都市）
「故郷の山麓で」　藤井典央（福井県福井市）
「ある追憶」　南雲佐和（神奈川県茅ヶ崎市）
「アイデンティティ」　梨香（青森県八戸市）
「ヒヨドリは絵になった」　林　直子（京都府城陽市）
「砂漠の幻想」　六川あきら（神奈川県川崎市）
「変遷」　西村省三（京都府京都市）
「私のヒロシマ」　山崎人功（長野県安曇野市）
「茶色の靴」　伊藤はるみ（千葉県佐倉市）
「光芒」　榎並掬水（広島県広島市）
「時鳥の歌」　川西葉吉（岐阜県多治見市）
「忘れじ　わが海軍の思い出」郷　芳美（鹿児島県鹿児島市）
「冬枯れの風景」　鈴木功男（静岡県沼津市）
「命さえあれば」　北村昭子（大阪府枚方市）
「摩訶不思議な〝物体〟」　金田正太郎（青森県八戸市）
「母の茶がゆ」　池田裕一（大阪府大阪市）
「地域の人々に支えられて」池田義朗（神奈川県横浜市）
「真子という名前」　田中真子（東京都八王子市）
「トムのおじさん」　日沼よしみ（山梨県南アルプス市）
「伯父」　飯島もとめ（長野県長野市）
「街角の唱歌」　斎藤　望（北海道紋別市）

選評



みずき　りょう

1942　北朝鮮生まれ
99　小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
2006　小説「お見合いツアー」で第49回農民文学賞受賞
07　小説「海老フライ」で第19回労働者文学賞受賞

読ませる勢いのあるエッセイ

水木　亮

私が最終段階の応募作を読んで思うのは、果たしてどれだけその書かれたエッセイが、力を持っているかの評価である。読ませる力のあるエッセイ、プロのエッセイでない以上文章は荒削りなところがあっても、そういう意気込みの感じられるエッセイを評価する。こう書けば審査員受けがするであろうと巧妙なエッセイもある。しかし、それはこちらにもわかるのである。

エッセイコンクールも来年は一〇年目を迎える。年々、エッセイの内容も充実し応募者の数も増えていて喜ばし

「沈黙としての異文化」　小池陽慈（東京都大田区）
「ブリキの缶と姑」　福田良子（福岡県北九州市）
「ごらん、君の輝く未来を」堀渕理恵（東京都府中市）
「詐欺のゆくえ」　藤田陽子（神奈川県厚木市）
「たたみ半畳の宇宙観～永平寺座禅修行に参加して～」成瀬　功（東京都目黒区）
「命ある限り」　山ノ内京子（大阪府摂津市）
「あだ桜」　中川一之（京都府京都市）
「雑草に教えられて」　井崎多津子（高知県安芸郡）
「食いしん坊」　奴賀節子（香川県高松市）
「輝き」　塚原　渉（北海道伊達市）
「私のアスペルガー症候群と機能不全国家」田中小百合（福岡県糸島市）

社会批評賞佳作

「言葉の力」　きくゐたかを（東京都多摩市）
「ソフトな裏技で説く購買力平価説」黒田隆幸（大阪府豊中市）
「自販機に百円玉を」　コミヤマシュン（神奈川県横浜市）
「『徳』と『得』」　ハイボール・オーマエ（大分県大分市）
「見ざる、言わざる、聞かざる」赤井ナノカ（長崎県長崎市）
「台湾旅行で八田さんに学んだこと」川瀬　潔（東京都練馬区）
「これぞ私の生きる道」　永池あけみ（熊本県入吉市）
「小さな捨石」　田桐　勲（愛知県豊田市）
「日本語よ　よみがえれ」　山内紀美江（東京都墨田区）

い。特にシニア世代の、今書いておかなければという思いがこめられた作品は心打たれる。

まず、私は島生樹郎さんの「『今』を生きる」が最もよく書けていると思った。津波に関するエッセイは昨年も最優秀作品があった。ここでは津波の後の彷徨う住民の姿が生々しい。事実の迫力がある。そのような苦渋の体験をしたから「今を真摯にいきること」「新緑の美しさが本当にいとおしい」という心境になるのだろう。貴重な人類の体験を記録としても残していきたい。

「文芸思潮」の最優秀にふさわしい作品と思う。

優秀賞の作品では、サトウユウさんの「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は、海に落ちた人を、船員を説得して探す話である。これも事件の展開に興味が引かれる。見間違いではないかという不安のなかで、海中に人をみたという自分を信じる気持ちの揺れがよく描かれている。

入選

「私のオーストラリア」　ウスイアスミ
「川堤を走る」　きひつかみ
「怒気」　くりた
「ヘレンの『ぶー』」　せんのう　あい
「やさしい娘」　マーさん
「五時点灯」　よすみこうすけ
「故郷」　伊澤古都里
「私の不思議なヒーロー」　羽田スウ
「ハーレー・ダビットソン」　吉田宏子
「大阪遠征」　九条之子
「過疎化の故郷から、声が聞こえる……」　佐藤義弘
「民家移築の思い出」　柴田大五郎
「仮想の人生」　秋山思源
「アラブ、ぶらぶら」　秋村耕野
「コブ談義」　十七団
「ウィッグ」　小野友貴枝
「いよいよきたか、いやいやまだまだ」　上村和子
「ボール怖い」　青井啄蔵
「寿司屋と私」　雪路
「ホームグラウンド」　泉　まり
「プレゼント」　船山千恵
「花が綺麗に見えた」　大桐信之助
「水仙と文さん」　谷川　奏
「深爪まで2、3ミリ」　朝生カイ
「ある運転手との出会いから」　渡辺寿美子
「思春期から青春と死へ」　島本青玄
「変身願望」　日向佐保
「奇跡の花咲く」　八坂明日
「こころに毒をかかえて」　碧海月子
「『無宗教』のホトケ様」　辺見　悠
「記憶のいたずら」　木村令胡
「ドミノ骨折」　木立慈雨
「ペットボトルの水」　六藍光洋
「ガマやーい」　島田和武
「ばあさんのとこ屋さん」　山本信之
「二〇一二・三・一一仙台」　酒井恵三
「最後の言葉」　寺岡寿子
「フラナという名の島」　西野久美
「飽食の裏側」　黒岡　實
「運命のいたずら」　齋賀由美子
「幸せはどのくらい？」　苑田有子
「少女A」　山崎文男
「晴れのち曇り……駅にて」　村田直美

沼俊さんの「永久の別れ」は、シルクロードの旅で、ドナウ河の水をすくうのが夢であるという亡くなった自転車仲間の言葉を実現する。灰色の塊がドナウ河に消えていく。忘れられない友情の風景がそこにはある。

岡野みつるさんの「チャッピィ」は事故に遭った猫のチャッピイの話である。ここまで猫を大切にし、尽くす姿に恐れ入った。

松川琴美さんの「虐待」はすさまじい実の両親から受けた自分の虐待を書いた。これが虐待の警鐘になることを願う。

奨励賞の作品では、

北美舜さんの「亡き母からの褒美」は無学だった母親の上の学校に行かせたいという思いを、定年になってから息子が実現する話である。六三歳で大学生となり、体育実習では若い大学生とエアロビクスを、恥ずかしくなる思いで学習し卒業を迎える。その挑戦する勇気は母親からの褒美でもある。シニア世代によい意味で刺激となるエッセイとみた。文章も手書きだが読みやすく、味わいがある。

南奈乃さんの「真っ白な帆に風を孕んで」は船員を養成する大学で学ぶ自分の娘のことを書いた。その厳しい実習の様子が興味を引く。またそれに耐えて頑張る娘への母親の思いがよく描かれている。

寒川靖子さんの「紫蘇染めの晒し木綿」は、自分の家に仮宿した兵隊に、別れの時木綿に梅酢に浸して乾かしたものをプレゼントした。喉の渇きを防ぐためである。短いが戦地に赴く兵隊さんへの思いがあふれていてよい。

青柳いすずさんの「ノー　マネー」は飛行機で一緒になった不幸なチ

「逃げるが勝ち」　秋元宣籌
「父に詫びる」　小川クニ
「秀吉が博多で食べた菓子」　清田進
「紙芝居の箱」　菅谷春子
「その色の記憶」　井上幸子
「畦みち」　渡辺庸子
「義姉の親切故に」　中田澄江
「ひとり娘の報復」　吉岡順子
「夫の入院」　菅宮慶江
「リバーシブルな紅白帽子と白いトレパン」　新井洋一
「『場の力』と『わくわく』のチャレンジ」　森喜代美
「言葉は人を自由にする」　藤川哲史
「昭和の新聞社そして支局記者」　香月よう子
「世の中が目まぐるしく変わっても」　山世孝幸
「五十年目の詫び」　渡邊和加子
「パンプキン・パンプキン」　野々下留美
「母と土曜日のきつねうどん」　倉田紗緒里
「うちのカメちゃん」　高橋正記
「Sさんのこと」　中村行寿

社会批評賞入選

「私が大衆映画に味方する理由」　御室孝
「愚痴の追伸」　沙山和子
「鬼火」　新庄　敏
「常識という名の幻想」　小林大祐
「カミナリおやじ」　森　幸夫
「真実の扉」　井　由美子

リの女性におかねをあげた。飛行機の乗り換えで、必死に窓から手を振る彼女の姿が一期一会で心に残る。

田賀せいしさんの「魂を捨てた父」は、台湾で警察官をしていた父親が敗戦で追われる身となった。父親がマークしていた人物に逆に助けられて帰国できた。それからの父親の変容が書かれている。そこにも愚かな戦争の傷跡が残る。

田仲浩子さんの「人気者にしよう～冬瓜編～」は冬瓜に関する楽しい話である。手書き原稿だが読みやすく、丁寧な文字から書き手の人柄が忍ばれる。それも大切なことである。

大森耀平さんの「いのしし考」は畑を荒らす猪の話だ。捕らえた猪に鉄砲を向けると涙をこぼすのが堪らないという。こちらも読んでいて堪らない。

外山寛子さんの「砂の墓穴」は朝鮮からの引き揚げに関わる忘れられない光景を書いた。貴重な記録である。

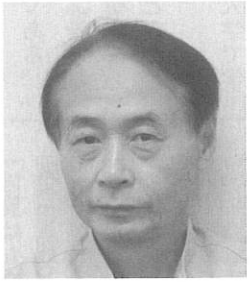
高橋惟文さんの「バードテーブルの砂」は震災は小動物の世界にも影響を与え、小鳥に寄せる愛情が胸を打つ。

そのほか印象に残ったのは、中川一之さんの「あだ桜」は読んでほろりとする。

川島英理沙さんの「隠しごと」はアダルトの女優になった友人について書いた。文章力を感じる。

上杉辰さんの「改心」は正直に、飾らず自分の経験を書いている。自分は女連れの遊びで出かけたが、貧しい村でけなげに働く少年を見つめる目がよい。また印南房吉さんの「杖、光る」は今年も健在で嬉しい。

読み手に思いが伝わる力のあるエッセイ。一〇年目を迎える来年にまた期待したい。



いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞

百花繚乱の充実

五十嵐　勉

今年は応募総数五二一篇と五〇〇の大台を超えた。内容も実に多岐にわたり、様々な人生とその体験を記し示してくれた。

人はそれぞれの多様な運命を生きている。その苛酷さ、激烈さに遭遇し、翻弄されるのも人生なら、それにひたすら堪え、そこに根を生やして乗り越えようとするのも、また本質的な生きる姿だろう。二つの火花が散る所に、生の充実があり、生きる芯が形成され、花や果実がもたらされる。この世界の真実の相を見せてくれる文章作品が今年も豊かに集まった。よい作品、優れた作品が昨年よりいっそう多く集まり、激戦で、優秀賞に値する作品はここに決まったより実質的にもっと多数あった。奨励賞レベルも鈴生（な）りで、例年の二倍以上はあったものの、涙を飲んでもらった。たわわな実りを感じる第九回のエッセイ賞だった。

運命との火花、その格闘を誠実な言葉に託して多くの人との共感の領域に結晶させようとする作品を私は最も評価する。そういう作品には、言葉に込められたエネルギーがある。思いの強さ、思いの深さと言っていいかもしれない。祈りが託されたものにもなる。それは必ず言葉の強さとして現れてくる。今回最もその言葉の強さを感じたものは、鈴木綾子氏の「私の『チゴイネルワイゼン』」だった。白血病になった息子の闘病とコンピュータ・グラフィックの表現による生き方を軸にした作品だが、むしろ言い足りない文章表現のうちに、生きる意味を積極的に模索する格闘の苦しみが伝わってくる。きれいな言葉や華やかさだけが点綴されているようだが、その間に潜む呼吸に足掻きや葛藤が隠されている。最優秀賞として第一に推した作品だった。

もう一つの最優秀賞、島生樹郎氏の「『今』を生きる」も、津波に襲われる現場の体験を生々しく伝えて、迫力がある。津波の襲ってくる様子、その力、それから逃れようとする力が自然の猛威との闘いのうちに実にリアルに伝わってくる。津波の体験記録として貴重なものだが、浪江町というと福島原発のすぐ北である。福島原発を襲った津波の勢力が具体的にわかるとともに、その被害の甚大さも窺わせる。しかし作品では福島原発に触れていない。その後の原発との関連も書いてほしかったと思って編集者として連絡を取ったところ、実は作品は全体の数分の一で、このあともっといろいろなことが続き、原発の問題もさらにあとから出てくるということだった。もしそれがつぶさに記されるなら、きわめて重要な記録になる。今後さらに続編を書いていただくということで、思わぬ方向に発展した。期待したい。タイトルがやや抽象的でもの足りないのも、これで納得した。この作品は氷山の一角である。

記録性として重要なドキュメンタリー・エッセイがもう一つあり、東海汽船の船上から遭難者を発見し、勇気をもって救助する話「あの夜、僕たちは成し遂げた。」（サトウユウ）も論議の的になった。海上で救助することの困難とそれに立ち向かう勇気を示してくれた点で、出色の作品となっている。最も選考委員の票を集めたが、特に印象に残るのは、船員の言葉である。「あなたお酒飲んでるで

しょ」「これが狂言だったらたいへんなことになるよ」「嘘だということがわかったら、二千万円くらいの損害賠償になるけど、それでもいいんだね」と言われたら、だれでもひるんでしまうだろう。そこを突き抜けて主張した態度に勇気がまぶしく光るが、もう一つここで立ち上がってくるのは、損害賠償の問題である。こういう場合、人名救助を優先して保険制度を作っておくとか、この壁をもっと容易に乗り越える仕組みを社会制度として構築しておく必要を感じた。発見者がこの筆者のように勇気のある人とは限らず、ひるんでしまう人もいるはずだからだ。その意味では、社会批評性も強く含んでいる作品である。

最優秀賞に近い評価をしたのは、山田まさ子氏の「救急車は呼ばないで」である。精神病院に二度も強制入院させられた母親の惨酷な体験からの恐怖を、命を失うまでの心理の壁として描ききった筆力は、明らかにこれまでの二作を数段超えた凝結を示している。ここには運命の狭間で裂かれる人間の傷みがある。これを書いたことで、山田氏も何かを昇華しえたと推察する。拍手を送りたい。

「虐待」（松川琴美）も選考委員の注目を集めた。文字通りの父親からの虐待で、このような酷い仕打ちが存在するのかというほどの酷さだが、これを乗り越えて、被害者の体験を普遍的な訴えとする姿勢に、光が射している。表にはあまり出てこないが、よく目を凝らしてみればこのような被害に遭っている人たちは少なくないだろう。それに目を向けさせてくれた作品として意義が深い。

西島雅博氏の「きっと、帰ってくっと」は、海で生きる人々の自然との闘いを愛する家族の情に重ねて、胸に深く染みる秀作になっている。西島氏も技量を上げている。読後、海の青さが水平線の母性となって彼方へ広がる美しさがある。

「心を守るために」（浅井真理子）は、近年多い、現代の都市生活の中で起こる内部の問題を、重い体験をとおして誠実に描いた好篇で、内部が壊れる傷みを、素直に前向きに捉えてやさしくむしろ前進を見せているところに開いた読後感が残る。ひたむきな人ほど現代社会の機能優先の軋轢の中でいつのまにか壊れている部分に気がつかされるケースは少なくないはずである。この作品はそういうたくさんの声を集めている気もした。

「空白の通知表」（城戸則人）は、戦争末期の広島県の呉の空襲とそれに続く広島市の原爆の体験を、通知表というめずらしい角度から綴った異色の作品である。視点の特異性が、最後の原爆のシーンとうまく重なって戦争のすさまじい一面を表出した。

今回戦争体験の記録が他にもいくつかあって、それぞれ深いものが宿っており、優秀賞に推したものの、不運にして届かなかったものもある。外山寛子氏の「砂の墓穴」は、

ソ連軍の侵攻によって打ち破られ捕虜になった日本兵が、移送途中で脱走し、ボロボロになって日本人収容所に辿り着き力つきて死んでいく姿を描いたものである。墓もつくれない脱走日本兵の異国での痛切な最期は、深く胸を打ってくる。出だしが遠回りで効果を損ねている欠点がなければ、優秀賞だったろう。また「紫蘇染めの晒木綿」（寒川靖子）も、戦地へ出る兵に飢餓の備えになるべく紫蘇を浸した木綿を贈る行為に、戦争のリアリティがよく出ていて、これも貴重な記録として読んだ。価値は高い。佳作にとどまったが「忘れじ　わが海軍の思い出」（郷芳美）も、日本海軍の兵の姿を生きたものとして届けてくれた重要な文章である。

定番となった「動物もの」は今年もいい作品が出た。「チャッピィ」（岡野みつる）の、交通事故に遭った猫を大事に育てる深い愛情は、筆者夫婦のやさしさにさらに明るい色を添えて心をあたためてくれる。

海外生活を素材にした作品は、今年は優秀賞が出なかったのが残念だが、惜しかったのは「紅無き落ち葉」（ならは　たかし）と「インド移住まで―天の配剤―」（李耶シャンカール）である。ならは氏の作品は移住したデンマークでの愛嬢の死を描いて痛切に響いてくるものがあったが、後半裁判になって社会問題に摩り替えられていくのが難となった。李耶氏の作品は海外に住み着くその経緯がより鮮やかにわかる好エッセイで、さらに腕を上げた結実感があったが、夫となる二番目の恋人の人物像がもっと生き生きと動けば、インドの大地が大きく立ち上がってきただろう。

「ももこの世界」（栗山惠久子）も私としては優秀賞としたかった作品である。発達障害の娘との母子ともどもの成長を深い眼で捉えて、そこに積極的な光を見い出す筆者の態度には崇高なものがある。眼差しに、高められていく昇華感がある。けっして繰り返しではない深まりと前進を賞揚したい。

優秀賞と奨励賞の境目も微妙だったが、奨励賞と佳作の境界線引きも困難を極めた。どれもおもしろく、興味深く、深く感じさせられるもの、魅力あるものがたくさんあったからだ。例年よりも当然受賞者が多くなったが、それでも足りなかった。率直に言えば佳作以下はかなりの作品に泣いてもらった。しかしできるだけ多くの胸に残った作品を「文芸思潮」に掲載して読者に読んでもらいたいと思っている。

奨励賞でも問題作品や印象深い作品、秀作はたくさんあり、挙げきれないほどである。連続九回受賞の印南房吉氏の「杖、光る」は一貫した氏の障害をむしろバネにして積極的に踏み出す姿勢が結実して輝きを放っている。「譫妄」（白楊風子）も死を前に人生全体を振り返る苦悩が悲

劇的業苦として浮かび上がってきて注目された。「白い傷痕」（宇佐美宏子）は、若き日の愛の苦悩を刻印深く描き出して、情熱と苦しみの鮮烈な青春を結晶させている。川畑和嗣氏の「事件」は、教会の信者と聖職者の狭間を厳しく剔出して短編小説としても成立しそうな鋭さを突き付けている。「隠しごと」（川島英理沙）は問題作。アダルトに出た友人の姿を追って孤独と性愛の亀裂を提出している。「THE　出産！」（犬伏久美子）も、出産の苦しみをズバリ描いて、ありそうでない率直でリアルな記録には瞠目した。「改心」（上杉辰）のフィリピンの自然の中で働く素朴な少年家族のみずみずしい生き方に心を揺さぶられる話は、すがすがしい。

社会批評賞は、今回突出した作品がなく、奨励賞が二作だった。旧ベルリンの壁を扱った「スズメたちは西へ飛んでいった」（西本美彦）と、「ダーチャとベーシックインカム」（歌野敬）である。ベルリンの壁という東西の政治体制の犠牲になった青春群像を現場の生活体験に基づいて描いた世界は鮮やかな色を残した。歌野氏は自らの自給率九〇％という実生活から構築した経済理論を基に新しい可能性を説いて斬新である。これがあるならという安心も得られたし、また原子力のような対極にあるものの危険性も逆に照射している気がした。「台湾旅行で八田さんに学んだこと」（川瀬潔）も意義のある報告で、先達の遺産を尊ばなければならぬ思いを強くしてくれるものだったし、「『徳』と『得』」（ハイボール・オーマエ）も現代に欠けているものを明らかにしてくれた。

科学記録として重要な作品が今年も寄せられ、漆畑晨斗氏の「ロシアに隕石が衝突した日」は、天体の大きな視野から地球の現在を照射して新鮮な角度から現在を浮かび上がらせてくれた。特別賞として賞したい。

様々に啓発され、様々に体験させられた、まさに百花繚乱の今回のエッセイ賞だった。充実を実感している。来年はいよいよ第一〇回、千花繚乱を期待したい。

野宿での自慢話

三神　弘

みかみ　ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

応募作の一篇、一篇は、作者がこれまでどのような本を読み、親しんできたかを打ち明けるものであり、また、作品が感動をもたらすものだとするならば、作者の意図する感動とはどういうものであるかを告白するものである。

当選作の島生樹郎「『今』を生きる」は、大震災から二年を過ぎた「今」から、あの日を振り返り、「息が止まった」という巨大津波の脅威を報告していく。その「今」とは、亡くなった人の多さと、いまだ遺体が発見されていないことを憂う「今」である。作品は「逃げ切れないと思った」という大津波の体験を描いていくのだが、どんな過酷な状況にあっても、人間であり続けることの意志と態度に眼が向けられていて、丹念だ。

たとえば、「おばあさん達を引き連れて」逃げていき、「野宿」をするほかなく、「燃やすものがないか周囲を探し回」ることになるのだが、やっと「たき火」に手をかざすことができたとき、「おばあさん」の一人が「箪笥にしまってあった五十万が流された」と洩らす。するとすかさず、もう一人が「私はもっと多かった」と言い張り、また別の「おばあさん」は、「高い着物を何十着も流されてしまった」と、無念とも、自慢ともつかぬことを言い立ててから「位牌を持ち出せなかった」と先祖に詫びる。

ここには、粉雪の舞う野宿のときでさえも、寒さと飢えにもまして、「おばあさん」達の「たき火」に差し出す手に、言葉に、生きることのいわば啓示というものを感じ取っていく作者がいる。そして「あれから二年が過ぎ」、「大切なのは今を真摯に生きることだ」という境地にいたる。大震災という体験を、歳月を重ねながらも、そしておそらくこれからも、個人の経験として深めていこうというところに、感動の質がある。題名も、率直だ。

当選作の鈴木綾子「私の『チゴイネルワイゼン』」は、「桜の花びら」が舞う季節に「急性白血病」と診断された息子と母との日々で、息子が個展を開催するのに奔走することや、息子を亡くし、「悔しさと悲しみ」で「胸がえぐられる」と訴えかけ、また、「芸術に国境がない」とも「味わい深い人生とは、人のために尽くせる喜び」だとの感慨もある。

実体験であるのかはともかく、作品の現実は、言葉で表わしていくほかなく、そのことでいうならば、この作品は書割りであり、感動の筋立て、仕組みづくりという印象を否めない。翻っていうならば、これらは、いわゆる誰が読んでも一定の評価を得られる作品の条件ではあるが、誰が読んでもというのは、文学ではあまり意味をなさない。見えないものを見ていく試みを、期待したい。

優秀賞についてふれたい。沼俊「永久の別れ」は、「ドナウ河の水をこの手で掬うのが、俺のシルクロードの旅の夢なんだ」というのが口癖だったものの、病いで他界して

しまった自転車仲間への、鎮魂である。そして「私」と「仲間」は、その夢を果たすために、ドナウ河を目指す計画を立て、自転車をこぎ出す。

ドナウ河では、遺影を隣に置いて腰を下ろし「ほんとなら、今頃は君と乾杯していたはずなのに」と語りかける。そして遺骨の「灰色の塊を押し頂いて」「ドナウの水に浸」したという。ここには、歳をとることを恐れなくなった人間の果敢さとともに、失ってはならないもの、求めていかなければならないものが暗示されている。

浅井真理子「心を守るために」は、よりよく生きようとすることが病いをもたらすという理不尽さをとおして、今日のテーマを提出している。端正な文章で、これは訴えごとではなく、自己検証によって得たものであり、「心の静けさというものは、訪れたときに初めて、自分の心が静かでなかったことを認識できる」は、みずみずしい。書くという営みは、健全な精神の働きによるものだということも伝えている。

山田まさ子「救急車は呼ばないで」は、母のこころのなかにあるものを自分のこころのなかに捜していくのだが、母への愛情にふさわしく、なかなか辿り着けず、悔恨になっていく。作者の作品を読むのは三作目だが、表現に過不足がなく、人物の関係が明らかになり、読み応えは増していく。それは、評価された過去の自作に習わず、真似ないからだ。

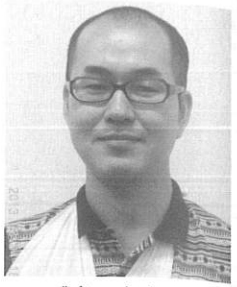
城戸則人「空白の通知表」は、小学校時代の通知表を偶然見つけ、評価欄の「防空事情ノタメ査定不能」の文字から、戦争の日々を思い出していく。行替えが多く、そのため細部が描き切れていないが、しかしそのことが、不足を読者に補わさせていくという効果をもたらし、記憶をたぐるという題材に見合っていくから、表現というのは不思議なものだ。

サトウユウ「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は、ごくごく普通の青年が、予期せぬ出来事から英雄になる物語で、したがって、こころの動かし方も、行動も身近にすることができ、愉快であり、批評もあり、題名も気が利いている。西島雅博「きっと、帰ってくっと」には、何よりも土地の感覚というものがある。松川琴美「虐待」は、時代の用語である意味を超えて、深刻さと、一途な訴えとで貫かれている。岡野みつる「チャッピィ」は、たんに猫への愛情や思いの丈を語るのでなく、観察が表現に反映している。夫婦の姿も見えてくる。

受賞にはならなかったが、強く推薦した作品に横山緝子「雛人形」がある。父母の手で、やがては娘たちの手で毎年飾られてきたという雛人形をめぐる記憶で、時代を経て、人が逝き、なお、今年も春を呼ぶ雛人形への感慨を描いていく。雛人形に人生を重ねていく手法に着目したい。

満漢全席、ご堪能あれ

都築隆広



つづき　たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文學界新人賞受賞
「狼を見る」（文芸思潮）
「ハネムーンきどり」（三田文学）他　月刊「望星」書評員
現在 TV のナビ番組などの構成作家としても活動中

沼津に深海魚釣りに行って、転んで右腕の骨にヒビが入りまして。「腕、どうしたの？」「沼津で深海魚を……」「腕、どうしたの？」「いや、深海魚を……」と、選考委員の先生方と顔を合わせるたびに「沼津」と「深海魚」を連呼しなければならず、顔から火が出る思いの選考会でありました。なお、利き腕が使えないため、この選評は音声認識入力ソフトによる完全口述筆記で書かれています。最先端技術バンザイ。

さて、今回の上位は「『今』を生きる」「私の『チゴイネルワイゼン』」「あの夜、僕たちは成し遂げた。」の三つ巴でした。「『今』を生きる」は震災モノですが、むしろその技術の高さが評価され、「チゴイネルワイゼン」は高い技術ではありましたが、それよりも真摯な内容が評価されました。「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は漂流者救出という衝撃的な内容でした。しかし、発見者の方が疑われ、圧力を受けてしまう社会システムや、ここに描かれている船員の性格の悪さなどのドラマ性の方が、話題にのぼりました。

この三作の中では、私は「あの夜僕たちは成し遂げた。」が面白かったです。「『今』を生きる」はかなり読ませるものの、応募者の間で「震災体験記を書けば入賞できる」みたいな風潮になっても困ります。「チゴイネルワイゼン」は白血病の息子の闘病についての話は良かったものの、遺作展が盛況であることや、作者が講演会をしている等の情報が、悲劇性を薄れさせてしまっていると思いました。「作者が本題以外で書きたい部分」が透けて見えてしまった点は残念でした。

ところで、当選作二作の論争の果てに、「あの夜、僕たちは成し遂げた。」がなんとなく存在感が薄まり、優秀賞に落ちてしまったことはまことに遺憾であります。選考はナマモノですから、斯様な事情で、「当選作に限りなく近い優秀賞」が生まれることが稀にあります。

同じく優秀賞では毎年恒例、ダメ人間エッセイ界のイチローとも呼ばれる（たった今、命名）、山田さんの「救急車は呼ばないで」。虐待系のエッセイのなかでも、最も極

悪な肉親像が描かれていた、その名も「虐待」。選考委員からの平均的支持があった、常連投稿者、西島さんによる「きっと、帰ってくっと」などの作品が高得点で、論議の的になりました。

特に「救急車は呼ばないで」は過去の山田氏の作品よりもクオリティが高く、「精神疾患で生まれる狂気を、どこまでエッセイとして評価していいのか」という点で、議論が分かれなければ当選作になっていたかもしれません。それにしても、いい意味でひどいタイトルです。

「虐待」も「これといった原因もなく、このような暴虐に走る人間が本当にいるのだろうか?」という議論が起こりましたが、私は逆に、因果関係もなく生まれる悪意の方が現代的で、生々しい恐怖のように感じられました。

さらに優秀賞「チャッピィ」は選考委員の先生方の大好きな動物感動ものとあって、若手を代表して上位入賞を阻止せねば……と思ったのですが、やはり熱烈な支持があり、優秀賞になりました。タイトルの時点で、すでにたまらないと、愛猫家でもある水木亮選考委員が熱く語っていました。涙もろくなるのにも程があります。

続いて、奨励賞。「魂を捨てた父」や「雛人形」は、実は優秀賞の「あの夜、僕たちは成し遂げた。」と同等かそれ以上に私は支持していたのですが、これまた他の選考委員の票が集まらず、このぐらいの位置になりました。

なかでも、「魂を捨てた父」は戦時下の台湾で、最も父親が疑いをかけていた現地民に匿われる警察官一家の物語で、とてもスリリングでした。個人的にはイチオシだったのですが、「魂を捨てた」という題名は、ちょっと、やりすぎなようにも感じられます。捨てたのは「魂」ではなく、おそらくは別のものであり、しっくりくる言葉がないから、「魂」という概念に置き換えられてしまった感がありました。「雛人形」は支持者も多かったのですが、戦中の記述に不明瞭な点があったことで、やはり奨励賞になりました。

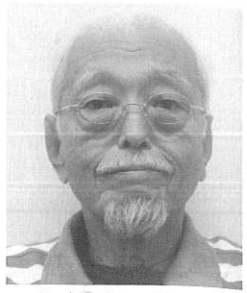
面白過ぎて公共性を逸していたり、終わってみると他作品に上位を譲ってしまった秀作が、今回は多かったです。作者と選考委員にとっては苦難の選考だったものの、そのおかげで、読みごたえのある作品が出揃いました。

猿の脳味噌や駱駝の瘤とは参りませんが、古今東西の珍譚奇譚、人情噺。「文芸思潮」流、作品の大御馳走「満漢※全席」、とくとご堪能あれ。

※満漢全席　満州族と漢族の珍味を集めた中国の宮廷料理。二十四時間では食べきれないとも言われる。

「私」の客観視

福岡哲司



ふくおか　てつし

1948 山梨県甲府市生まれ
樋口一葉研究会員
都留文科大学非常勤講師
著書「評伝深沢七郎ラプソディ」(TBS ブリタニカ第3回開高健賞奨励賞)「遠い散歩近い旅・山梨文学散歩」(山梨ふるさと文庫)ほか
「猫町文庫」編集発行人

人々の見聞・体験はこれほど多様なものかと驚かされるのが常である。今年も多岐に渉るモチーフの文章たちに触れることが出来た。と同時に、「私」をも客観視できるか否かが、エッセイの課題になることも痛感した。

六八年前にゼロどころか大きなマイナスで迎えた「敗戦」。訝しく感じる現代の空気にかかわっているかどうか、戦争の時代をモチーフにする文章は多かった。

城戸則人「空白の通知表」。呉が連合軍による激しい空爆に曝されたことは知っていた。が、筆者の記す昭和二十年の爆撃の甚だしさは「知識」を越えた。地上を逃げまどっていた「私」は国民学校一年生。粗末な初めての通知表に記されていたのは「防空事情ノタメ査定不能」という文字だった。字を読むことの苦手な母が、そうとは知らず丁寧に保管していたものだ。母への思い、時代の不条理さ……幾重にも思いの残る文章である。構成をさらに整理されたら印象もさらに鮮明になるだろうと惜しまれる。

外山寛子「砂の墓穴」は、敗戦後収監された北朝鮮の収容所での体験である。シベリアへ移送される途中逃げだして来たミイラの如く衰弱した日本兵。筆者ら同胞を目にするや意識を喪失(うしな)ってしまう。そして、死。大人二人子ども三人で砂丘を手指で掘り屍を埋葬する。筆者が長い間かかえこんできて、整理できていないものだ。体験が凄まじいだけに「兵隊さん」「王子様」「メルヘン・チック」などの用語が不用意である。

黒田直隆「名残の夜空―カナダ人捕虜との交友」

捕虜のわだかまりの深さ。戦時、民間企業が捕虜の強制労働を請け負い、戦後の処理にも当たったことについての貴重な証言である。被害者意識の強いカナダ人と対応に苦慮する「私」という類型が標題の「交友」の語と共に気になる。

鈴木綾子「私の『チゴイネルワイゼン』」

難病の我が子に対して無力感を抱く親。その果てに鎮魂の思いはこういう表現をとるのだろう。標題にもかかわる終末部の手慣れたまとめ方が気になる。

武藤蓑子「李の花」の繊細かつ熱情ある表現が魅力的で

印象に残った。筆者の望郷と母への想いの表れだろう。抒情的な表現は母の姿態の哀しさを余計に際だたせる。

メンタル・ヘルスが今や企業・組織（学校を含む）の重大なテーマであるにもかかわらず、それが正面から見つめられることは相変わらず少ない。当人独り己だけに向かい合い無限に靴下を裏返し続けている。「心を守るために」世界に喪われてゆく。もはや「休職」だけでは済まぬ事態を提起している。

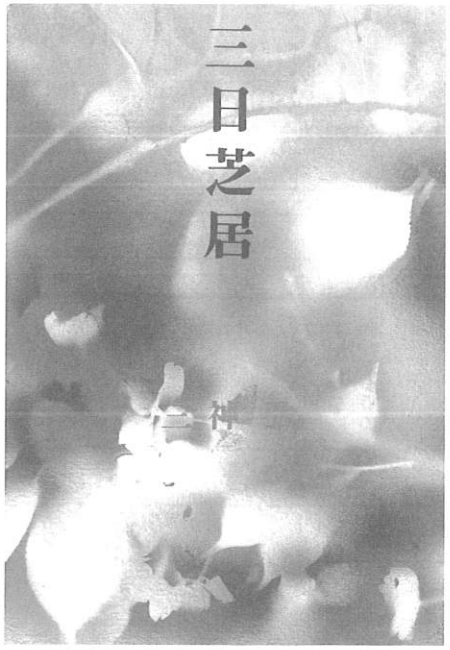
西嶋雅博「きっと、帰ってくっと」はモチーフの選び方が小説的である。それだけに、エッセイとしては、書き手とモチーフとの間に隙間を覚えるのも事実だ。だから、郷愁の念が余韻として残るものの、漁村生活の昔に変わらぬ苛烈さの印象は薄められてしまっている。

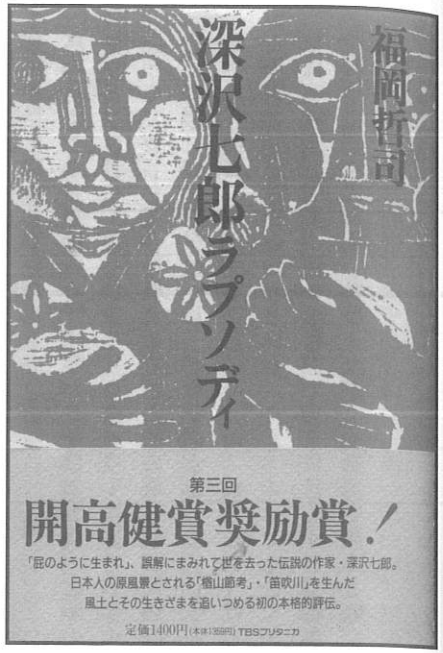
サトウユウ「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は特異な体験が読ませる。ただ、年配の船員が「悪」として類型的に描かれていることが物足りない。

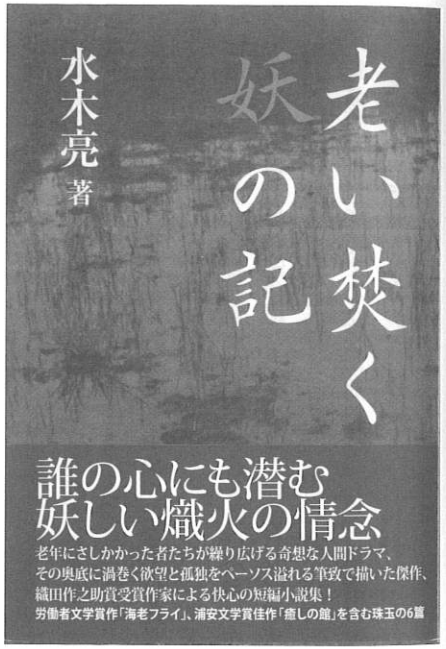
岡野みつる「チャッピィ」

高齢化を速めるのはなにも人間の世の中ばかりでなく、ペット界も同様である。いずれがいずれをみとるのか、人とペットとが共生し、共老して行くのである。筆者の飼い猫への愛惜が浸透している。

選考会風景







私の「チゴイネルワイゼン」

鈴木綾子

風が吹くたびに桜の花びらが窓に舞いかかり、やわらかな葉桜が見え隠れしていた。

あの日より十五年になる。当時、息子は二五歳、念願のグラフィックデザイナーになり、東京タワーに近いデザイン会社で、有名企業の専属として精力的に取り組んでいた。

入社三年目の春の夕べ、息子から電話があった。

「母さん、明日、入院することになった。病名を言うけど驚かないで。急性白血病らしい」

私は咄嗟に、明日一便の飛行機で東京に行くから、母さんが行ったら大丈夫！　と答えたが、受話器を置くと膝が震え出した。旅行鞄に用意するものさえ浮かばない。

「お前がしっかりしないでどうする」

強い口調だった。夫は何も映っていないような目で、窓の外を見ながら、

「味わい深い人生になるぞ。章に感謝する時が来る。きっと来る」

私は味わい深い人生なんてどうでもよかった。とにかく誤診であってほしい、と願った。

医師からは、あと数日発見が遅れていたら命はなかっただろう。助かる道は骨髄移植しかないと言い渡され、すぐに抗癌剤治療が始まった。

中学高校と柔道で鍛えた息子の筋肉は逞しく、風邪をひいたこともないほど元気だった。

あの高校卒業式の帰り道、「ほんとに楽しい高校生活だった。母さんありがとう」と言った。希望の大学に入れず、東京の美大予備校に行くことになっていた。車内のＦＭラジオから女性の声のようなバイオリンの音色が流れてきた。

「ぼくこの曲好きなんだ。何ていう曲？」と言って私の顔を覗き込んだ。――サラサーテの「チゴイネルワイゼン」だった。

面会謝絶の個室で、息子の仕事の内容を聞いた医師は、病室にパソコンを入れて絵を描いたらどうかと、異例の許可を出してくれた。息子の瞳が黒く光った。抱えきれないほどの大きさの愛用のパソコンをベッドの横に置き、マウスを握った。何度も何度も描き直しながら、一枚のＣＧ（コンピューター・グラフィック）が完成した。

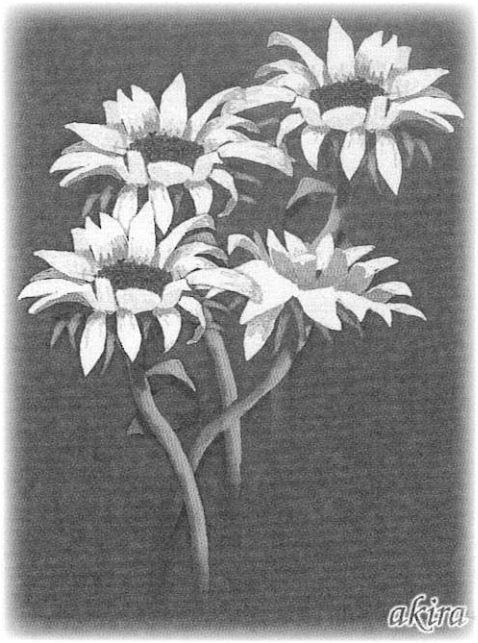
駿馬に跨って赤いマントをなびかせた、アルプス越えのナポレオンの勇士である。息子は額に入れて、病室の白い壁に掛けた。「不可能という文字はない」の名言に、「病気が治らないはずない」と自らを重ねるように、じっと眺めていた。その後、静物や花火、ふるさとの阿波踊りなどを、次々と描いていった。

息子より四歳年下で京都の大学に行っている娘に、息子の入院を伝えたとき、「その病気は骨髄がいるのよ。両親の合う確率は3％だけど、兄妹は25％だから、私の骨髄が合えば全部お兄ちゃんに上げる！」と早口でしゃべった。私は言葉を失くした。

血液検査の結果、家族のＨＬＡ（白血球の型）はだれも合わなかった。だが息子は表情も変えず「母の日が来るけど、何もプレゼントができんよ。一歩も外へ出られんし」と言う。そして次に病院に行ったとき、「母さん、母の日のプレゼント！」と、小さな絵を手のひらにのせた。グリーンをバックに黄色いひまわりの花が四本、天空へ伸びていた。

血液病棟は子どもたちも大勢入院しており、息子は絵を描いてはプレゼントしていた。子どもたちのよろこびの声を聞くたびに、なお得意そうにパソコンに向かっていった。

抗癌剤の副作用で高熱が続いたり、指先まで痺れていたり、起き上がれない日もあったが、浮かんだイメージを横



になったままデッサンし、気分がよくなるとマウスを握った。

徳島の私と、東京の息子を繋ぐのは、当時の重くて大きな携帯電話だった。

「母さん、太陽がいっぺんに五つ昇った！」

――ドナーが五人見つかったのだ。骨髄手術の日を待った。緑の夏が来て、黄色い秋が過ぎた。手術日は一二月三日に決まった。医師より骨髄幹細胞をゼロにするための、抗癌剤と放射線治療の前処置の厳しさを知らされた。息子は医師の胸元を見つめていた。

「世界の有名なデザイナーも体験したことのない環境の中で、どんな絵が閃くかと思うとわくわくします」

若い看護師さんの眼尻に、涙が溜っていた。

手術日の朝、娘と二人で無菌室の窓際に立った。息子の肩の筋肉は削げ落ち、腰は両手で回るほど細くなっていた。医師が両手で持ったポリ袋を、息子の前に差し出した。息子は手を合わせた。名も知らぬ二十歳の青年からいただいた骨髄……。点滴台に掛けられた牡丹色の骨髄液が、透明の細い管を通って息子の体内へ入っていく。その一滴、一滴に、祈りを込めた。

手術後五日目、パソコンの前に座ろうとしたが倒れた。少しマウスを握っては休み、また起きては描きながら二週間後、「母さん、できたよ」と、窓越しに掲げた絵は、夕日に照らされた枯れ木の大木に、ハロウィンの妖精二人が電球を灯していた。ドナーへの感謝と生きる喜びを表現したとのこと。「新しい命を」と題した。手術前と、画風が一変していた。

二六歳の誕生日も無菌室で迎え、一か月半の無菌室で五枚の絵が生まれた。どの絵にもハロウィンの妖精二人がいて、行きたい所、したいこと、夢見ることが、絵になった。

一九九八年二月、退院を前に、「個展を開きたいな。セレクトした四〇作品のポストカードを作ってチャリティバザーにして、お世話になった骨髄バンクに寄付したい」と言う。

家族みんなで大賛成した。新たな目標に向かっていけることが、うれしかった。

八月、徳島と東京の二会場で開催することになったが、六月に再び入院。息子にとって再入院は、前回以上に死の恐怖が立ちはだかっていた。それでも息子の目は何かを求めるように生き生きと燃え、病気という宿命を使命に変えて創作に挑んでいた。

京都で就職していた娘から、「私の人生で、今、何が一番大事なことかを考えたの。仕事を辞めてきた。お兄ちゃんの世話に東京へ行く。個展も成功させてあげたいんよ」との電話。――ありがとう。後は声にならず、熱い固まりが喉をふさいでいた。一流ホテルの宿泊費以上の差額ベッド代と医療費に、私は仕事を休むことができなかったのだ。

八月、個展「生きるよろこび」は、徳島も東京も想像を超える入場者で大成功であった。その反響の模様を新聞各紙が取り上げてくれ、NHK・BS放送が世界に紹介してくれた。

「鈴木さんにとって、絵を描くことの意味は何ですか？」

「ぼくにとって絵を描くことは、生きることです」

参加者から、「何年生きたかより、何人の人に感動を与えたかが大事ですね」

など、身に余るメッセージをいただいた。祖父母にも会え、懐かしい同級生とも再会できた。

その二週間後、「母さん、すぐ来て！」の電話に、飛行機に飛び乗った。息子は肺炎に侵されていたが、息子と娘と親子三人で語り合った。息つく間もなく語り合った。

「病名を告知されて家に帰る時、道行く人がみな幸せそうに見えたよ」と、胸の内を吐露する。そして急に大きな声で、

「母さん分かった。今まで家族に心配をかけるのが辛かったけどそうじゃない。使命があって家族になったんだね。今度生まれ変わってもまた家族になれるね。うれしいなあ。家族の絆が深まったね」と言う。私は出そうになる嗚咽を必死でこらえた。

「ぼくの遺言と思ってメモして」と言われ、一瞬、顔が強張った私を見すごさず、

「ぼくは死なないよ。死なないけど書いて……。人間の幸せは、目先じゃないよ。もっと深いんだ。本当の幸せは、どんな境遇の中でも、希望を持ち続けて乗り越えていける心の中にあると思う。母さん、みんなに教えてあげて！」

「『……本当の喜びは、苦悩の大木に実る果実』と、ユゴーが言っているの。

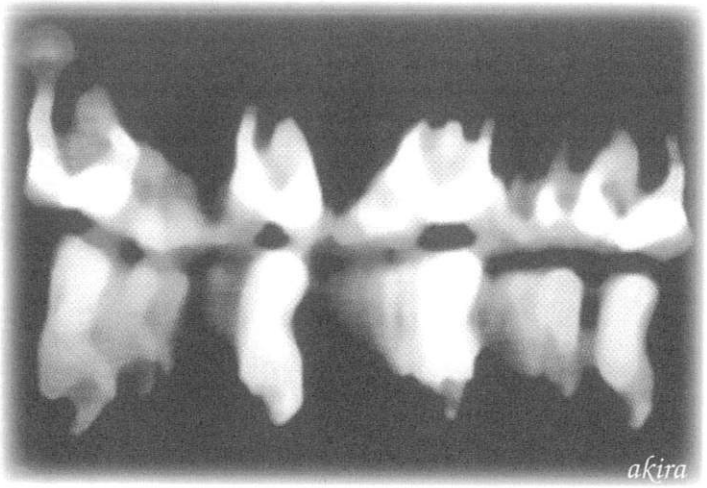
章は今、本当の喜びを味わっているね」と私は言った。黒い緞帳が垂れ下がってくるような病室で、生死の淵を超えて語り合える、不思議な、しかも神聖な空気に包まれた夜だった。

明くる日、徳島から主人が到着し、息子を抱きかかえた。「章、ようがんばったなあ。もうベッドに縛られることはない。自由に空を飛べるぞ！」と語りかける父親を、息子は今まで閉じていた瞳を大きく開けてじっと見つめていた。いつ息を引き取ったのかわからない最期であった。

一年後、アメリカ・ミネアポリスで開催された全米骨髄バンク総会に、日本代表として家族三人で招待された。息子の遺影と代表作品二〇点を抱えて太平洋を渡った。遺作展会場では二〇数カ国の人々が鑑賞してくださった。「作品は温かさと希望に溢れている。彼の生き方のように」などの感想をいただき、芸術に国境がないことをあらためて感じた。

以来、県内外で遺作展を開催してきた。現在は息子の絵と体験を通しての話を学校などから要請され、講演に行かせていただくことがライフワークの一つになっている。

私にとって味わい深い人生とは、「人のために尽くせるよろこび」だと思う。



柳の芽が吹き始めた頃、医師から外出許可が出て、銀座のパーラーに行ったことがある。

「ぼくが、死んだら、いつか、忘れ去られるね……」とさびしそうに目を伏せた。「章の絵は永久に残るよ」と答えた。「チゴイネルワイゼン」の曲が静かに聞こえてきた。

今も、ジプシーの哀愁を湛えたこの旋律を聴くと、息子の悔しさと悲しみが共鳴して、胸が抉られる。そして憧れるように歌う2楽章、火花を散らして疾走する3楽章からは、無念さと感謝を、創作のエネルギーに変えて「生きる喜び」を絵に託した、息子の熱情が伝わってくる。

受賞の言葉

鈴木綾子

昨年度の「文芸思潮」授賞式に、はじめて出席させていただいて、とにかく驚きました。読み上げられる表彰状の文面が各賞ごとに違っていて、いずれも主宰者の思いが脈打っているのです。また壇上に掲げられた看板の文字は、パソコン出力ではなく力強い毛筆でした。あとで五十嵐編集長の筆と知りました。場内は、世界各国からの受賞者と家族と仲間たちで溢れ、審査員の先生方の講評を、熱い視線で食い入るように拝聴しています。真剣な中にも温もりのある授賞式に、私の胸は震えました。また来られたらいいなあ……と思いながら帰路に着いたのでした。

今年三月、元気だった母が突然癌の宣告を受け、入院手術となりました。幸い手術は成功しましたが、入院中にエッセイ賞の締切りが近づいてきました。深夜パソコンに向かうと心労のせいか吐き気がするのです。でも今、書き留めておかなくてはと思う熱い血が、キーを叩かせてくれたようで、何とか仕上げることができました。

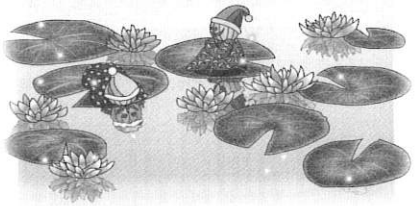
この度「最優秀賞」という身に余る賞をいただけたのは、今日まで励まし支えてくださった多くの方々の真心と、推敲の際に助言を下さった方の御指導のおかげです。

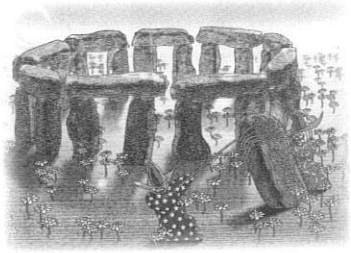
来年は息子の一七回忌、最高の供養をいただけると思うと、ただただ感謝でいっぱいでございます。

鈴木綾子

すずき　あやこ

1948 徳島県生まれ
ピアノ教師／主婦
国立徳島大学総合科学部「日本近現代文学」科目等履修生4年在学中
2008　徳島県主催「とくしま文学賞」
随筆部門・最優秀賞
12 同文芸評論部門・最優秀賞
「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞





「今」を生きる

島 生樹郎（せいじゅろう）

まだ時折余震は続いていたが、一時は建物もろとも死を覚悟した二度の長く大きな揺れはさすがにもうこないだろうとようやく気持ちも落ち着いた時、自宅に戻らなければと思った。海岸から約百メートルの家には八十六歳の母が一人でいる。同僚に家に戻ることを告げ、無謀ではないかという声を背に車に乗り込み、あちこちに亀裂が入った箇所や半分近く陥没している道路に注意しながら、自宅に向かった。

浪江町請戸（なみえ　うけど）は、崩れたブロック塀が道まで散乱している所や、完全に潰れた古い家屋もあったが、幸いなことに自宅は外見上何ともなかった。すぐに車を降り、玄関を入って大声を上げながら家中母を捜し回ったが見あたらない。隣の斉藤さんの家ではと走って行き、声をかけるが応答がない。念のためにもう一度家に戻って捜したもののやはり人の気配はない。母が避難したことは間違いなさそうなので職場に戻ることにした。浜街道に出てなにげなく左の海の方角を見た時だった。

一瞬スローモーションのような映像が目に映り、息が止まった。十数メートルはあろうかという堤防の遙か上をおおいかぶさる茶色い巨大な波だ。逃げ切れないと思った。すぐにアクセルを踏みこむ。目の前の舗装道路はまっすぐに伸び、二、三百メートル先を車が二台走っているのが見えた。巨大波は左から襲ってくる。とっさに右にハンドルを切ってたんぼ道に入った。枯れ草のでこぼこ道を車と

一緒に何回もバウンドしながら、数百メートル先の小高い山に向かって全速力で走った。ルームミラーに目をやると、どす黒い大波が家や瓦礫を巻き込んで迫って来るのが写っている。心臓は高鳴り、頭ではできるだけ早く車を乗り捨て山にとりついて少しでも上にのぼるしかないと、それだけを念じていた。

山にあと数十メートルと近づいたとき、思わず絶句した。山に沿った砂利道に車三台とその側にはおばあさんたちが四、五人立っていたのだ。急いで車を降り、「波が来る。早く山に上って」とおばあさんたちを大声でせき立てながら背中を押すように山に誘導した。おばあさんたちもすぐに事態をのみ込み、木々の枝や野バラの棘にひっかかりながらも我先にと必死によじ登り始めた。私も後から夢中で小さい木々につかまりながら数メートル登ったその時、波が来た。足先に波が触れるか触れないかのまさに間一髪だった。

細い木に捕まりながら半身になって後ろを見ると、自分の車は波に呑まれようとしている。中には何が入っていたろうと漠然と思ったとき、すぐに、足元近くの波間に人の頭が浮かんでいるのに気がついた。おばあさんたちの一人が逃げ遅れたにちがいない。左手で捕まっている木を持ち直し、右手を伸ばしながら身を乗り出して「この手を掴んで」と叫んでいた。おばあさんも水の中から片手を出したが、波が揺れ動いているのと流れついていた太い木が邪魔になり、なかなか掴むことができない。指先が何回か触れ、更に前に身を乗り出してどうにか掴むことができた。すぐに引きずり上げようとしたが、足場が斜めで滑りやすく踏ん張りがきかない。引く波に持って行かれないよう掴んだ手を離さないでいるのが精一杯だ。「絶対に手を離さないで」とおばあさんに声をかけると、上の方に向かって「誰かいないか。手伝ってくれ」と大声で怒鳴った。もはや手を握っているのも限界だった。すると上から自分と同じくらいの中年の男性が側まで降りて来た。助かったと思った。私は残された力のすべてを使って掴んだ手を必死で引っ張り続け、男性は女性の腕とその脇を支え、二人で渾身の力を込めてやっと水中から身体を引きずり上げることができた。ほっとする間もなく水位が上がってきたので第二波が来たことを悟り、更に上へ女性を引きずり上げ、ここまでは波は届かないだろうと思ったところでようやく手を離した。

目の前には、松の木々の間から、信じられない光景が広がっていた。請戸は、小学校の体育館の屋根、マリンパークの屋上、防風林のてっぺん部分以外はすべて水没し、それらは湖に浮かぶ大小の島々のように見えた。隣で先に逃げていたおばあさんの一人が、気の抜けた声で「もう今年は、田植えは無理だな」と他のおばあさんに言っている。

命が助かっただけでも幸運なのにと思っていると、突然胸が苦しくなった。気管が詰まったようにヒーヒー音がするだけで酸素が吸えない。これからおばあさん達を引き連れて何とかしなければならないのにと焦った。

ようやく呼吸が落ち着き涙目をこすりながら周囲を見渡すと、七、八十歳のおばあさんが四人、さっき助けた六十歳ぐらいのOさん、私と一緒にOさんを引きずり上げてくれたSさん、三十歳代と四十歳代の男性が二人、今この場にいるのが私を含め九人であるのが分かった。後で分かったことだが、おばあさんたちをつれて逃げてきたのはこの二人の男性で、自分たちは山の上で家族と連絡を取っていたらしい。

とにかく国道六号線を目指そうということになり、若い二人の男性が先頭で斥候の役目をにない、以下おばあさんたちとSさん、後尾がOさんと私という順序で、一列になって西に向かって歩き始めた。励まし合いながら二時間近く歩いたろうか。いつのまにか日が沈み、辺りも薄暗くなり、山の中で迷ってしまった。山道はアップダウンがきつく、おばあさんたちの体力も限界なので適当な場所を見つけて野宿するしかなくなった。

外気はかなり冷えてきて凍死の恐れもあり、とにかく暖をとる必要があった。男性の一人がライターを持っていたので、男四人で燃やすものがないか周囲を探し回ったところ、近くに乗り捨てられた車が三台あって、信じられないことだが、その中の一台の軽トラックの荷台にポリ容器が数個あり、なんと石油が入っていたのだ。私はこの時ばかりは神様に感謝した。山の縁には津波で流されて半分泥に埋まった家や漁船の他様々な瓦礫が流れ着いていたが、石油が手に入ったので、四人で泥の中から太い木材を引っ張り出し、何本かおばあさんたちがいるところへ運んだ。木材を組んで、それにポリ容器の石油をかけライターで火をつけた。火が勢いよく燃え上がるのを見たとき、これで一晩なんとかしのげると思った。

外気の温度はさらに下がり、いつのまにか粉雪が舞っている。九人で火を囲んだものの、火が当たっている部分だけは暖かいが、他の部分は肌が痛くなるほど寒く、手焼きせんべいのように、火が当たる箇所を数分ごとに一晩中変え続けなければならなかった。

そんな状況の中でも、おばあさんたちの会話には、ほほえましくもたくましさを感じるときがあった。一人が箪笥（たんす）にしまってあった五十万が流されたと言うと、別のおばあさんが私はもっと多かったと言えば、さらに別のおばあさんが高い着物を何十着も流されてしまったという風な会話がさんざん続いた後、一人のおばあさんが突然思いついたように御先祖様に申し訳ないと言ったのだ。耳をそばだてると、位牌を持ち出せなかったと悔いているのだった。優先順位が一番後ではないかと思わず笑みがこぼれた。

吐く息は白く、まだかなり寒かったが、ようやく周りが薄明るくなり始めると、みんなで協力して焚火を消し、再び国道六号線を目指すことになった。

ほどなくして国道へ繋がっていると思われる山道を見つけ、昨日と同じような順番で歩き始めたが、さすがにおばあさんたちに疲労感が強く、それでも一、二時間は歩いたろうか。先頭からの六号線が見えると言う声に、思わずため息が出た。

六号線はあちこち陥没したり亀裂が走っていたりしていたが、それを避けるように車は双葉町から浪江町へ流れていた。私も国道まで降りて両手を広げ、ようやく一台の白い軽トラックが止まった。運転手のおじさんに簡単に事情を話すと、快く全員乗っていいと言ってくれたので、おばあさん一人を助手席に、あとの八人がお互い助け合って後ろの荷台に乗り込んだ。車が走り出すと身を切るような冷たい風に涙と鼻水が止まらなかったが、荷台には安堵感が漂っていた。

あれから二年が過ぎた。大震災による津波で亡くなった方々は浪江町だけで百数十人。そのほとんどが請戸地区と隣接する海沿に住む人々で、いまだに遺体が発見されてない方々も多数いる。あと数秒波を見るのが遅かったら私もその中の一人だったはずで、なぜだかわからないが今あらためて自分は生かされたのだと思う。

そもそも千年に一回の大津波が、何代も続く先祖の時ではなく自分が生きている時に、世界中で海沿いに何十何百万と家がある中で、まさか自分の家を襲って家ばかりか周りの物すべて根こそぎ持っていくなどと誰が想像できようか。結局人生何が起きても不思議はないのだ。物という物はすべて失った。最初はそのことを嘆きもしたが、そのうちに失ったからこそわかったことがあると気がついた。確かに大切で貴重な物は多々あったはずだが、実は自分で勝手にそう思い込んでいただけで、なくなったといって生活する上で困る物は意外に少ない。なにより立ち止まってこれからの自分の「生」について考えることができたのが一番だ。何が幸か不幸かはすぐには結論づけられないし、それも本人次第ということもある。今では自分の人生の途中で本当に貴重な経験ができたと素直に思うことができる。自分にとって大切なのは今を真摯に生きるということだ。目の前の木々の新緑の美しさが本当にいとおしい。

受賞の言葉

島　生樹郎

今まで何かに応募した経験といえば、ヨーグルトの蓋やある食品の袋を何枚か集めて送り抽選に当たれば賞品がもらえるといった類いのものだけで、自分の書いた文を応募するというのは今回が初めてです。締切直前に思い切ってポストに入れてしまった後も少し後悔の念が残りました。結局エッセイ賞応募要項の中の「残しておくべき重要な記憶・記録」という部分が私の背中を押してくれました。

震災直後からこの体験はいつか記録に残しておかなければという思いがありながら、いつの間にか二年が過ぎようとしていました。そこで自分なりに今年で定年を期にという理由をつけ、津波の体験部分だけでも書き残そうとどうにか書き上げました。実際は、ようやく津波から生還し浪江町の体育館にたどり着いたものの、休む間もなく今度は原発から避難しなければならなくなって、それからがまた大変だったのですが、その後のこともいずれ記録に残そうと思っています。

書いたものは原稿用紙で二十枚ぐらいになり、とりあえず津波の経験は記憶が薄れても大丈夫とホッとしました。そのまま三か月くらいほっておいたのですが、そのうちに自分の書いたものを読んで他人はどう思うだろう、誰かに読んでもらいたいという欲求が湧いてきました。そこでネットで調べ貴社のエッセイ賞応募要項を見たのでした。ただ応募規定が十枚以内のエッセイであるということで、削れるだけ削ってそこに現在の自分の心境や考え方を加えたものが今回の作品です。正直入選できれば上出来と思っていただけに、最優秀賞の通知をいただいた時は、うれしさより自分の書いたものがその賞に値するのかと不安のほうが勝りました。目をつむって振ったバットがたまたま真芯に当たって、ホームランになってしまった感じでした。それでも時間がたつと、徐々にうれしさがこみ上げてきました。選考委員の方々にあらためて感謝申し上げます。

島　生樹郎

しま　せいじゅろう
1954年生まれ
福島県浪江町出身
早稲田大学教育学部数学科卒
79年　福島県立の高等学校の数学の教員となり現在に至る
（来年定年）
現在の勤務校（双葉高校）は福島原発より約3.5kmの位置にあり、震災後１年目は県内４か所のサテライト校で、２年目（去年）、３年目（今年）は一か所に集まり、いわき明星大学の校舎設備の一部を借りて授業を行っている。私自身は家（原発から約6.5km）を津波で流されたため、郡山市に居住し、片道約２時間半をかけていわき市まで通勤している。

第９回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞 Essay

救急車は呼ばないで

山田まさ子

昭和三十年、万年筆屋の勤務を終えた母は、播磨屋橋で、待ち合わせた父を待ち続けた。父は現れず、母は最終バスのテールランプを見送った後歩いて何キロもの道を歩いた。暗い長浜トンネル、そこは母の故郷である被差別部落と、普通のひとの暮らす町との境目であった。母は父との恋に賭けていた。村を抜け出せる、義母の虐待を逃れられる命綱が失われた。実際は父は麻雀に耽っていて忘れたのだが、初心な母はひとは約束を守るものと信じていた。どこまでも続くかのような暗いトンネルを抜けるうち、母はノイローゼになった。

それから母は精神病院に二年投げ込まれた。電気ショック療法のため記憶を失った。最初はイロハの文字も書けなくなっていた。幼い頃の記憶は再び戻ることがなかった。わたしの祖父はやせ衰えた娘の姿に、退院させてくれと頼んだが、医師は許可しなかった。事務員が患者の食費を使い込み、患者は栄養失調になったという新聞記事が出た。病院から、祖父は衰弱した母を背負って連れ出した。

医師が、廊下まで追いかけてきた。

「退院許可なぞいらん。娘は殺される」

「血統じゃ。もういっぺん分裂病になったら、今度は二度と助からん」

祖父の背に浴びせられた台詞だった。

平成十二年秋、母は体調を崩した。大きな病院はこわがるので、クリニックに連れて行った。風邪と診断された。処方された薬を飲んで一週間経っても、〝風邪〟はちっともよくならなかった。なんにも食べられなくなり、お腹が痛い、痛いという。

「風邪でこんなに痛いもんかねえ、まさ子」

「病院に行こうよ、おかあさん」

「病院に行ったら、帰れなくなる……救急車は呼ばないで。病院は……行きたくない。……病院はこわい」

母が自宅にいた最後の夜、あの夜の、一晩のことは、くっきりと憶えている。母親はうめき続け、トイレに行こうとしたまま起き上がれなかった。わたしはずっと傍にいた。からだをさすっても、風邪薬を飲ませてもずっと痛いという。

朝になり、母親の顔は青ざめて、唇は色を失くしていた。それでも、きっぱりという。

「救急車は呼ばんといて。……病院はいや」

その声がかぼそくなり、うわ言のようになっていく。お母さんがいやがっているのに、無理に病院に連れていくことなんかできない。わたしはどうしていいかわからなくなり、朝八時になってようやく、友人に電話した。

「おかあさんが、白くなっている」「バカ、早く救急車を呼べ」「いやがっている」「無視しろ、呼ばないかん」

わたしは母親に謝りながら、救急車を呼んだ。

隊員が部屋に上がり、眼を閉じて声も出せなくなっている蒼白い母の首に手を置いて脈を取った。このとき、ちょうど母はがっくりと首をたれて気を失った。

「意識がない。病院に搬送します」

日曜日なので詳しい検査はできなかった。若い医師は腹にガスがたまっているのだろうと笑顔を向けた。応急措置のまま母は放置された。「おしっこを一晩していない」と、わたしは看護婦に訴えたが、大部屋の看護婦はわがままを言っているといわんばかりに睨んだ。

「この部屋は、そんな患者が来るところじゃありません。自分でトイレに行ってもらいます」

だが母はもう歩けず、尿自体が出ないのだ。月曜日の検査まで待った。

翌日の検査で、別のベテラン外科医師から十二指腸が溶けていて腸と癒着している、すぐに手術を行なうと知らされた。

四時間、わたしはただ祈った。手術後の母はジャバラホースに繋がれていて、声をしぼってホースが蛇みたいでこわいといっていた。喉が渇いても水が飲めないので、わたしはガーゼを湿らせて口にくわえさせた。治ると信じていた、あの日々はまだ幸せだった。少なくとも口はきけたの

だから。

だが、この声の出せる時期も短かった。呼吸困難をおこして、喉にチューブを繋ぐことになった。母に、チューブを鏡で見るかと尋ねると、こわいからいいという。

初めて母のおむつに緑色の水みたいな便が出たときは嬉しかった。薬品の匂いしかしないのだが、病院の洗濯室で洗いながら、便があることが誇らかだった。

わたしは毎夜、静まりかえった病室で薄暗い中で点滅する光を眺め、機械の無機質な音を聞いていた。ベッドの隣にマットを並べて眠った。母親が苦しくなったらひいて呼べるように、母親の手首とわたしの手首を紐で結わえておいた。

翌年二月、母は亡くなった。脳梗塞が起きていた。血液を溶かす薬を使うと、手術した腸が塞がらなくなる。何もできない。あと二日だといわれた。

母は苦しみ始めた。金魚が空気中にはねるように身を震わせながら、わたしに眼で問いかけた。なにが起こったのかと。わたしは嘘を並べ始めた。

「ほら、最初の手術のときも、苦しかったやん。今度も治るき」

最初、信じたようだった。唇の動きで、癌じゃないか、と聞いている。むろん、癌ではなくて、脳に血栓ができているのだが、母親は癌以外は助かると思っているのだ。

「癌やない、治るき」

ここまで話してから、わたしの眼から涙がとめようもなく溢れた。四カ月に及ぶ闘病生活は治るためのものだった。今さら、もう治らないなどとどうしていえよう。母は、呼吸器をあてたまま、悟ったようにわたしを見詰めた。隠し切れない不安のまま、これまでの感謝の気持ちも、さようならも、こめられる限りのすべての思いをこめて、わたしたちは眼をのぞき、視線を重ねた。

意識を失った母の最期は、心臓マッサージのための電気だった。電気をあてて飛び上がる母親の体をみながら、わたしは瞬間、思った。もうやめて。楽に死なせてやって。

あれほどおびえていた電気を命の最後にかけるくらいなら救急車を呼ばなければよかった。それから後悔ばかりが続いていた。付き添っていた友人の話によると、わたしは死亡宣告を聞き、「そう」と言ったきり、反応のない様子だったという。泣きはしなかった。母親の死がよく飲み込めないのだ。

執刀した医師は、わたしを呼び出し、責めた。

「なぜ、もっと早く連れてこなかった。あと一週間、いや四日早ければ助かったいのちなのに」

「一週間前にクリニックに連れていって……」

「どこのクリニックが診断したかは知らない。どこの医者

でも症状を言わなければわからないんですよ。あなたのおかあさんは異常に我慢強かった。その性格を知っているのは娘のあなたしかいない」

娘が伝えなくって誰が伝えるんだという医師の言葉を、わたしは毎日、毎日、反芻した。医師のいうことは正しかった。たったひとりのおかあさんを守りきれなかったのだ。葬儀屋が飛んできて、葬儀の日程が決まっていく。棺桶は大きすぎてアパートに入らず、わたしは葬儀会館の部屋で棺桶の隣で眠った。おかあさん、傍に行くから待っていて。

土佐の言い伝えには、棺桶に写真を入れると、死者が呼びに来て早く死ねるというのがある。いえば止められるから、私はこっそりと母親の帯にわたしの写真をねじ込んだ。

火葬が終わって白いかぼそい骨を、わたしは齧(かじ)った。骨になっても、おかあさんがさみしくないようにと思ったからだ。

平成十七年五月、離婚していた癌になった父親を看取った後、うつ状態になったわたしを、精神科に知人が連れていった。

「電気治療をしましょう」

主治医は「よく効きますよ」と勧めた。

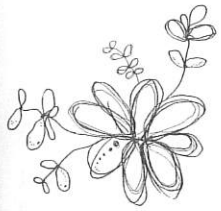
「おかあさんが病院をいやがったので、あなたも子供の頃から未治療で放置されたんですね」

電気はこわい、わたしはそういい募った。母親を殺したと泣き出すと、「不可逆的」「ディフェクトのPT」〔統合失調症末期妄想〕と診断書に記された。

生前、母に電気ショック療法のことを聞いたことがある。眼を見開いて胸に手をあて「痛かった」とだけいった。それ以上は聞けなかった。だが見開かれた眼に浮かんだ怯えがすべてを語っていた。

母の時代には電気を流す邪魔にならないように髪を剃られた。奥歯にガーゼでくるんだゴム管を噛ませ、頭部に電導子を押し当て痙攣を誘導した。当時の医師の指導書には気を失ったら水をかけろとある。失禁する者、激しい痙攣での骨折脱臼、心臓停止時の注射。エーテルの臭いで察知し、暴れる者はベルトで縛った。

ずっといわない言葉があった。たしかにわたしは母親を殺した。その判断力の乏しさで。けれども耳に残る切れかかった糸のような母の声。救急車を呼ばないで、病院はこらえて。



受賞の言葉

山田まさ子

受賞の手紙を頂いた夜、母が夢に登場しました。お盆の日だから出てきたのでしょう。一番、喜んでくれるひとです。選考して下さった先生、編集の皆様、ありがとうございました。

精神病院通院中にお世話になった皆様にも感謝申し上げます。松山市の精神科医、笠陽一郎医師はホームページ「毒舌セカンドオピニオン」でご自身の体調を犠牲にしながら減薬に取り組んで下さいました。光愛精神病院の島田医師は電撃治療に強く反対しています。「地上の旅人」さんは家族を精神医療のせいで亡くされながら、多くの患者を助けています。

そして仲間たち、大量処方され薬剤の副作用に苦しんで亡くなったみんな、この賞はみんなのものです。

どこかの町にいるあなた、理由もわからず、震えていませんか？　かつてのわたしのように。もしもあなたがそこにいるなら、その暗闇にいるなら、まずピルカッターを手に取ってください。山のように処方された錠剤のうち、ひとつぶを四分の一に切って下さい。そこから始まります。少しずつ、わずかずつ、自分の脳をダマすようにしながら減薬してください。

精神科医には、丸投げしないで。

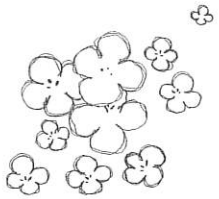
医療の現実を知らなかった、母子でおろかな道を歩んだ者からの手記です。

今でもなんにも知らずに無邪気に医師の処方薬を飲むあなたがいる、どこかにいることを考えると、たまらない気持ちがします。宗教も健康食品もいりません。あなたがあなたを助けるしかない。お読み下さって、ありがとうございます。

山田まさ子

やまだ　まさこ

東京生まれ　土佐育ち
法政大学文学部卒
松戸市元民生委員
第12回JTB旅行記賞二位
高知県芸術祭文芸賞
法政大学懸賞論文最優秀賞



第9回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

虐待

松川琴美（とはる）

私は実の両親から虐待されて育った。物心ついた時には、身体中無数の傷痕があり、両ふくらはぎ全体には熱湯による火傷の痕が醜く残っている。額と両眉にも幾数かの傷痕がある。これはまだ一才にもならない頃に頭から溝に投げ込まれてできたもので、後に助けてくれた近所の人が話してくれた。引き上げた時、顔が血で真っ赤に覆われていたそうだ。

毎日殴られ蹴られ、頭は瘤だらけ。瘤の上に瘤が何重にもでき、枕に頭を置くこともできない。寝返りを打つ度、その擦れる激痛で飛び起きた。父は、「お前は要らんのじゃ」と女として生まれたお前が悪いと自分の暴力を正当化し、責め続けた。私は男として生まれなかった自分の罪で押し潰され、悲しみで小さな胸が張り裂けそうだった。壁に投げつけられ、土間に叩きつけられ、気を失ってしまったことも多々あった。幼いながらも冷え切った身体を横たえたまま、意識が戻った自分に「死んだはずなのに……」と呟きながら朦朧と死を思い、天井を見ていた。凄まじい暴力と罵詈雑言で身体も心もズタズタにされ、いつも台所の隅でがたがた震えていた。父の帰宅する自転車のペダルをこぐ音で、そして、近づく足音で、私は心臓が恐怖で破裂してしまいそうになり、両手で胸を押さえていた。

競艇、競輪、パチンコの負け、会社での鬱憤、全てを晴らすために拳で殴る。顔は腫れ上がり、アザだらけ。唇は切れ、血が滴り落ちる。日々の腫れとアザの上に、容赦なく拳を上げ、腹を蹴り上げる。激しい痛みで悲鳴を上げると「うるさい！」と怒鳴り、一層力を入れて殴る。頭を両手で庇（かば）うと、「その手をどけろ！」と余計癇癪を起こし、震える手を抓（つね）り上げ、殴り続ける。もう、このまま殴り殺

してくれ、私は心の中で絶叫していた。泣くと「泣けば済むと思とるんか！　まだ、ワシは腹の虫が収まらんのじゃ、この、糞ガキ！」怒鳴り声が、さらに甲高くなり私の心を突き刺した。

母は一度もこれを制することがなかった。それどころか、むしろ冷淡な目で父の虐待を煽り、言わば一番卑怯な手で自分の鬱憤を晴らしていた。母は事あるごとに、「お前を生んでがっかりした。生むんではなかった。女を産んだ女は田舎に帰れんよ、恥ずかしいて」と私の耳元で囁くように嫌味たっぷりに言った。その冷たい声が、心を針のようにチクチクと抉った。

母は保険の外交をして働いているからと言って全く家事をせず、食事も作らなかった。そのため五、六才頃から全て私の仕事となった。掃除、洗濯、夕飯の用意、弟の世話。遊ぶ時間など到底なく、一日中働いていた。涙を流しながら一生懸命やっても、怠けていると因縁を付け、父は殴り、母はそれを加勢する。毎日が地獄で、死を思わない日はなかった。

しかし、その虐待に加え、小学校に上がると、執拗な性的嫌がらせが始まり、パンツを脱がされ裸にされ猥褻な話を聞かされた。私は恐怖で逆らうことも出来ず涙を堪え俯いていた。そこには、何と母まで加わっていた。私の助けを求める目を見ながら母は嘲笑っていた。私は、その事が何より辛く悲しかった。高学年になると父のその行為が益々酷くなり、寝込みを襲われる事も何度もあった。そして中学二年のある深夜、就寝中突然髪を鷲掴みされ、木製ハンガーで何十回も鞭を打つように叩かれた。背中じゅう蚯蚓（みみず）腫れし、出血と体液で、寝巻きが背中にへばりつき、身体をくの字にして横たえ理不尽なこんな仕打ちに呻きながら死を決心した。しかし、死に場所を探し街を彷徨っていると、決まって誰かと出会い、私の決心はその度に揺らいだ。

そんな日々が過ぎ、高校二年、十七才の秋、到頭、父が包丁を持ち出し切りつけてきた。私が初めて抵抗を試みたからだった。暴行を阻止された夜勤明けの父は激高し、「このガキ、逆らう気か！」と、逃げる私の後頭部を三回切りつけた。包丁は髪を切り、皮を切り、骨を切った。その痛みはそれまでに無いもので、言葉では表せないほどだった。

私は「もう、嫌や！」と初めて声にして、家を飛び出そうと玄関に走った。すると、

「親を何やと思てるんや！」

父は骨が折れるほどの力で私の腕を掴み、顔を真っ赤にし鬼の形相で再び包丁を振り上げようとした。私はその時咄嗟に父に体当たりした。その包丁で殺されてしまえばいい、これで死ねると覚悟したのか、それとも追い詰められ

た鼠だったのか自分でも分からなかった。だが、父は怯んだ。その瞬間、私は外へ出た。

ひんやりした秋風が吹いていた。その風に傷口が痺れ、手をやった。三ヶ所の傷口から血がどくどくと流れ出ていた。血は髪と絡み、べったりと首筋にまとわりつき、そこからまた肩へ染みていった。脈拍と連動して激しい傷みの波が容赦なく押し寄せてくる。号泣しながらどこをどう歩いたのか、気が付くと見知らぬ公園に辿り着いていた。傷みに喘ぎ、何時間もそこのベンチに座っていた。血糊で固まった髪が板のようになって風を受ける。優しいそよ風なのに、拷問のように傷口を攻撃している感じだった。

「何でここまで……」

涙が溢れて止まらなかった。あそこには母もいたのだ。居間でテレビを見て笑っていた。夫が娘に包丁を振り回していても、自分には関係のない事なのだ。もう既にその頃には、私は母の愛も救いも諦めていた。いつかはきっと父の行為を止めてくれるのではないかと淡い期待を持っていたが、ことごとく裏切られてきた。涙で滲む木の影が母の姿に見えた。「お母ちゃん、そんなに私が憎いのか。私が死んだ方が嬉しいんやろ」

私はその影に聞いた。一度母に聞いてみたい言葉だった。私は母に「そうや」と言われるのが怖くて聞けなかった。影はその問いに答える間もなく落ち葉で消えてしまった。

自分が余りにも惨めに感じた。犬や猫だってこんな事をされない。

ましてや自分の子どもに……。

いや、自分の子どもだからこそ……。

他人の子どもならば犯罪になるが、自分の子どもなら誰にも咎められない。親だから罪にはならない。私には彼らの心の中が分かっていた。

日が暮れ出し、辺りが徐々に暗くなっていった。朝の登校時から何時間経ったか分らない、一日がとても長く感じられた。今朝の事が、遠い昔の出来事のように思える。冷えた身体に生ぬるい血が止まることなく流れ、段々意識が遠のいていきかけた時、偶然そこを幼友達が通りかかり、助けられた。八年ぶりに会った彼女は私の様を見て直ぐに察してくれた。

「何も言わんでええ」

彼女の人間らしい温かい声が私を地獄から救ってくれたと思った。私は彼女に支えられ彼女の家へ。

私は彼女たち家族の優しい心に包まれて、そこに居候させてもらいアルバイトをしながら高校を卒業した。

それから四十年、父に切りつけられた傷痕は骨がへこんで禿げ、今も髪を梳く時、髪に引っ張られて電気が走るように痛む。その度にあの日を思い出してしまう。

現在は夫と二人の娘に恵まれ、幸せに暮らしている。長い年月トラウマに悩まされ、虐待という文字を見るだけで身体が硬直し手も震えだし、忘れようと思っても忘れられない。忘れたふりをしていても、直ぐにフラッシュバックして昔の記憶が鮮明に蘇り、苦しみと悲しみが込み上げてくる。今でさえふっと背後に父が立っているような気配を感じ、怯えて振り返ってしまう。

私は、この自分の生い立ちを娘たちが成人してから話し、苦しさから逃れるため、そして自分が壊れてしまわないために必死に書いていた日記も読んで貰った。壮絶な暴力と辟易するほどしつこい性的嫌がらせの数々が克明に綴られている日記。娘たちは、「大人になるまで、話さないでいてくれてありがとう。もし、子どもの頃に知らされていたら、きっと自分がされたように感じて耐えられなかったと思う」と泣きながら言った。長女がきっぱり「そんな親、おらんほうがましや！」と言い放ってくれた。私はその言葉に助けられた思いがし、娘たちに慰められながら堪えることなく子どものように声を上げて泣いた。

私は愛情に飢え、ほんの一欠けらのその一片でもいいから愛情が欲しかった。それが叶わぬと思いながらも諦めきれず渇望していた。特に愛して止まない母の愛情が……。その手のひらから零れ落ちた愛の破片をくれるのなら私はどんな事をされても辛くなかった。しかし、今私はその愛情を両手に抱えきれないほど夫と娘たちから貰っている。愛される資格など無いと思っていた私を愛してくれて心から感謝している。私は生きてきた、そして生かされてきた。この幸せを得るために。殴られ続けても、橋の欄干から突き落とされても、包丁で切りつけられても、死んでもおかしくなかったのに死ななかった。そして、自ら命も絶たなかった。

新聞で虐待の記事を読むと身が切られるように辛い。虐待されている子供たちの姿が目に浮かぶ。「助けて、助けて」と怯える子供たちの悲鳴が聞こえてくる。愛されることを願いながら虐待死した子供たち。愛を餌に躾と称して虐待する親たち。虐待に言い訳や理由など無い。況して、虐待の連鎖など無い。私の両親は虐待などされていなかった。一人息子の父は溺愛され何不自由無く育てられた。母もお手伝いさんがいる裕福な商店の娘だった。両親は唯の一度も誰からも手を挙げられたことが無い人たちだった。要らない子ならば、虐待をしていいのか。人はこれほどまでに一番弱いものに残酷なことが出来るものなのだろうか。私は心から切に願う、世の中から虐待が無くなることを。否、無くさなければならないと。どうか、振り上げた拳を広げて抱きしめて欲しい。いつだって子どもは親を愛しているのだから。

受賞の言葉

松川琴美

とても賞を頂けるとは思ってもいなかったので大変驚きました。この栄誉ある賞を授けてくださり心から感謝致しております。

このエッセイを書くに当たり、色々悩みました。まず封じ込めていた自分との対決、過去を振り返る作業が辛く、そしてそれを文字にするのはもっと苦しく、最初はなかなか筆が進みませんでした。父は私が本を読み、文字を書くことを非常に嫌い、見つかると想像を絶する暴力を振るい本を破り捨て、罵りました。その中には教科書もありました。そんな環境で絶対見つかるまいと命を掛けて書いてきた日記を読み返し、幼かった頃の自分を励ます親の目で書こうと決めました。私の生い立ちは戦場で捕まった捕虜のように恐怖と絶望しかありませんでした。その一部を書き留めるきっかけを作って下さり本当にありがとうございました。これからも自分をあの呪縛から解き放つために書いていきたいと思っております。

松川琴美

まつかわ　こはる

1973　尼崎市立尼崎高校卒業
77　結婚　飲食店経営
現在に至る

第9回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞 Essay

チャッピィ

岡野みつる

これまでに私は四匹の猫と暮らしてきた。そして分かったことがある。猫というものはまさに人間同様、随分と性格や行動に違いがあるということだ。どの猫にも忘れがたい思い出はあるが、その中で最も長い間一緒に暮らした雌猫のチャッピィの話をしたい。

生後わずか一週間ほどで目もしっかりと開いていない捨て猫だった。哺乳瓶でミルクを飲ませるところから始まった。我が家は私と妻、そして私の父母が住んでいた。時々、成人して県外にいる娘と息子が加わる。チャッピィは家や庭を自由に出入りし、家族の一員となっていた。

しかし、災難はある日突然やってきた。半年ぐらい経った頃、チャッピィは自宅の前で交通事故に遭ってしまったのだ。その時の状況は分からないが、どうにか家の庭まで戻りツツジの木の下でうずくまって「ウーウー」と唸っていたのだった。動くときには前足二本でだらりとした下半身を引きずっているという状態であった。

急いで、獣医さんのもとへ連れて行った。一体どうなることだろうと家族中が心配していた。結果は脊髄損傷で後足や尻尾への神経が麻痺しているらしい。しかし、治療中に左の後足の神経は反応することがわかった。つまり三本の足でどうにか歩けるようになりそうだ。それを聞いた私と妻はいったんホッとしたのだが、すぐに次の難題が降りかかった。なんとチャッピィは自分ではオシッコとウンチができなくなっていたのだった。

私と妻の介助がそこから始まった。「オシッコは一日二回、ウンチは最低でも週一度はさせて下さいね」との女の先生の言葉にどうしたものかと困ってしまった。とにかくオシッコの方は先生に要領を教わりながら、一日朝晩の二

回、妻との共同作業で行なうことになった。

先ず、オシッコシートを広げ、その上に猫を乗せる。妻は猫が動かぬように両前足の付け根を抑える。そして私が猫の腹の下へと手を伸ばし、手探りで膀胱あたりを掴み、強からず、そして弱からず揉みしだくように尿を出してやるのだ。初めはうまくできなかったが、何度も繰り返すうちに上達していった。

一方、ウンチのほうはかなりの難題で私達にはできなかった。そこで週一回通院して先生にお願いすることになった。それ以来、一日二回オシッコを取ること、週末にウンチを取ってもらうために通院することが、私たちの生活リズムに組み込まれた。正直なところ、一体いつまで続くのだろうかと思ったものだ。

こんな私達夫婦の苦労や心配を知ってか知らずか、いや知るはずのないチャッピィは、大人二人がかりのオシッコ取り作業が終了すると、決まって「フーッ」「ハァーッ」と威嚇するが如く唸るのである。

私は思わず「何が『フーッ』だ！　何だ、その態度は！人が折角オマエのために苦労しているんだぞ。『アリガトウゴザイマス』だろう」と怒り返してしまうのだった。こんなセリフを作業が終わるたびに毎回のように繰り返していた。妻の通訳では「それはチャッピィの『ありがとう』なのよ」と贔屓（ひいき）する。チャッピィにしてみれば、一日に二度も、何をされるのかという恐怖と苦痛の時間であっただろう。そんな状態から解放されて、ほっとしたがゆえの「フゥーッ」であることは分かっていた。また、自分でオシッコができないことで腎臓や膀胱に悪い影響が出て、クスリを飲まなければならないことが度々あった。餌に混ぜてもそこは食べ残してしまうので、スポイトにクスリを入れて無理やり口を開けさせて飲ませることもよくあった。当然、チャッピィは暴れるし、こちらも噛まれたり引っ掻かれたりすることになる。大変なのはチャッピィの方であり、そのあとはぐったりと疲れた様子だった。

初めの頃のチャッピィは、シャム系で目がブルーの真っ白な猫だった。それがみるみるうちに体がクリーム色がかってきて、半年後にはまるで顔はパンダのマスクを被ったように黒のまだら模様となってしまった。それでも先生は「美人さんですね」と言ってくれるので、妻は「そういえば品のある顔をしている」と言っていた。

ケガをしてからチャッピィは、神経が萎縮して体に右後足が張り付いたままなので三本足で体を揺らしながら歩いていた。そして神経の通わない尻尾をペタンペタンと廊下に打たせながら歩いてくるので、その音でこちらへやって来るのがすぐに分かったものだ。

そんなチャッピィにも実に驚くべきことが何度もあった。チャッピィがいかに強くて逞しいかを見せつけられたのだ。

チャッピィは庭をパトロールするのが日課となっていた。よその猫が侵入してこようものなら、たちまち両者にらみ合いとなり、チャッピィは唸りながら威嚇をする。気付いた私が庭へ出ると相手の猫はひるんで逃げ出す。味方を得たチャッピィは途端に強気になり追いかける。それは普段は三本足で歩いていることが嘘のように、体のバランスを崩すこともなく、猛烈な勢いで追いかけるのだ。

「あれ？　歩くのも不自由だというのに」

私は呆気に取られて見ていた。不自由な体であっても縄張りを守る。我が家の庭を守ろうとするチャッピィを頼もしいと思うと同時に動物の本能の凄さを知った気がした。

チャッピィが言葉を話せたら言うだろう。

『人間達は何かと言うとすぐ不幸になった境遇を嘆いたり、他人を悪者にしたり悪態をついたりするでしょう。でもアタシたち動物は、今この時をどう生きるかがすべてだわ。そこには過去の失敗をとやかく言ったり、これからの予想のつかない未来をいたずらに心配することもしないのよ』

あるがままの自分を受け入れ生きていく動物達。欲と智慧を持って自然や人生を変えようとする人間達。目まぐるしく進化する科学技術の中で生きる今日の人間はほんとに幸せなのだろうか。もしかしたら不必要な不幸も創り出しているのではないだろうか。

チャッピィのオシッコ取りと週一回の獣医通いが七年ほども続くことになった。

先生は、「この子は大したものです。でもお父さんお母さんが七年間もオシッコ取りを続けてきたことも大したものですね」と感心したり褒めてくれたりした。そのように褒められればそうかも知れないが、これだけ長い間、毎日オシッコ取りをしているとすっかり日常の一コマとなっていて今や特別なことという意識はなかった。またチャッピィが交通事故で不自由な体になったのは、きっと家族の誰かの厄を身代りになって引き受けてくれたのだと思っている。毎日のオシッコ取りくらいに文句を言うべきではないのだ。

チャッピィと暮らし続けて七年半が経っていた。その頃になって異変が起こり始めた。

時々、癲癇（てんかん）のような発作を起こすようになったのだ。それを見るのはたいへん辛かった。私達は何もしてやれず発作が治まるまでただ見守るだけだった。痙攣しながら苦しみ、発作が漸く治まると顔は涎（よだれ）まみれになり、ぐったりとしていた。日を追うごとに癲癇を起こす間隔は短くなり、その痙攣も長くなっていった。先生は、「七年前の事故の影響が今になって出てきたのでしょう」と言った。飲み薬、注射、点滴とあらゆる治療はしたが、あまり効果はなかったようである。命綱であるオシッコ取り作業も痙攣を誘発してしまうので、私達も切なく哀しい気持ちになってしま

うのだった。治る見込みも希望も持てないままチャッピィも私達もだんだんと憔悴していった。

そして、とうとうその日はやってきた。チャッピィは発作で苦しんだ後にソファでぐったりとうずくまっていた。リビングの明るさがチャッピィにはきついのではないかと思い、座布団の上に乗せて静かな暗い廊下で休ませようと連れ出していたのだ。

風呂から上がった妻が暗い廊下で静かにしているチャッピィのそばに行き、そっと顔を撫でようとしたとき、その異変に気付いた。眠っているのではなかった。

私は「最後の時は頭を何度も撫でてやりたかったのに」という残念さで一杯だった。

妻は「自分の手の中で息を引き取らせたかった。暗いところで一人ぼっちで死なせたことに悔いが残る」と何度も言っていた。

チャッピィだって最後のお別れがしたかったかも知れない。

『ありがとう』とか、『さようなら』とか。

可哀そうな終わり方だった。でも、よくぞ長い間、病気・怪我に苦しみながら我が家の一員として生活をともにしてきてくれたと感謝の気持ちで一杯になった。ペットクリニックの先生から大きな花束が届けられた。

チャッピィがいなくなり我が家は静かになっていった。

あんなに話しかけていた一匹の猫はもういないのだ。一年間は供養のつもりで新たな猫を飼うことは控えた。チャッピィの存在の大きさをしみじみと味わいながら。

それから一年余りが経ち、今は二匹の猫と暮らしている。仲良くじゃれ合っているかと思えば急に噛みつき合ったり、追いかけっこをしたり、何とも賑やかなことである。

一匹はドアノブにジャンプして器用にドアを開け部屋を出入りしているワンパク盛りの雄猫と、もう一匹は遠慮がちなのか臆病なのか、いつも静かにしている雌猫である。

夜も更けた。静かになったと思っていたら、二匹の猫はぴったりとくっつき、お互いに舐め合って、眠りにつき始めるようだ。

受賞の言葉

岡野みつる

一昨年の応募は残念ながら二次選考止まりでした。今年は迷いながらも、とにかく研鑽を積むためにもと応募してみることにしました。今回の題材はペットのことであり、読む方にしてはどうしても新鮮味に欠ける内容になってしまうのではないかと思われて、入賞以上は難しいかなと思っていました。

このテーマの愛猫チャッピィのオシッコ係を私達夫婦は長い間務めてきました。その体験や動物の強さに感服させられたこと、そして末期の頃の状況などは私達の記憶に深く残ることでしょう。しかし、それでもいずれ時間とともに少しずつ忘れていくことだろうと思い、今のうちに整理しておきたい気持ちで書いてみました。

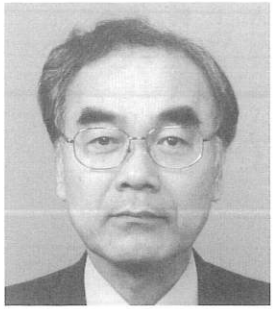
後半の部分は文章を割愛しながら何度も読み返しましたが、その度に当時の状況が思い出されてじんわりとしてしまうのでした。

応募した後は、何か肩の荷を一つ下ろしたような気持ちがしました。きっと愛猫への供養が出来た気分でほっとしたのでしょう。できるなら入賞という結果が付いてきてくれればなおさら有り難いことだとは思っていました。

この度、小生のエッセイを選んで下さった先生方に感謝し、この受賞をきっかけに今後も少しでも上達するべく努力をしていきたいと思います。

あれ以降、新たに飼い始めた猫二匹も一年を過ぎ、すっかり大きくなりました。今夏の猛暑には流石に参ったと見え、廊下に身体を横たえ、もうダメといわんばかりに伸びております。

ありがとうございました、ニャー。★



岡野みつる

おかの　みつる
富山県高岡市在住。60歳
民間企業で25年のサラリーマンを経て自営業

第9回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

きっと、帰ってくっと

西島雅博

まわりを海に囲まれた日本では、海難事故が多い。

五年前の六月にカツオをとりに出漁したいわき市小名浜、酢屋の第五八寿和丸が、銚子から三五〇キロの沖合で転覆遭難した。乗組員のうち三人は救助されたが、四人は死亡、他の十三人は行方不明となった。痛ましい限りだった。

小名浜港から捜索と慰霊のために出る船を、行方不明の家族たちが悲痛な声をあげて見送る光景をテレビで見て、思わず涙が出た。

原油高騰や乱獲、後継者問題などで、日本の漁業が大きな岐路に立たされているといわれて久しいが、〝板子一枚、下は地獄〟であることは、今も昔も変わりがない。

昔は、といっても昭和二、三十年代の頃のことだが、漁船の座礁や衝突、火事、沈没などの事故は、今よりもっと頻繁に起きていたように思う。気象情報の不正確さや船の無線の不備などが、その原因だろう。

その頃は大型漁船はないから、近海や遠く北洋での小型木造漁船の遭難であった。今ほど大きく報じられることもなかったのではないか。

小名浜一小で同学年だった男子と女子の生徒の父親は、ともに海で死亡した。私より二学年下の阿部健一君が、海難事故で亡くなった自分の父親のことを綴って、全国作文コンクール小学校の部で「日本一」になったこともあった。

中学校では音楽の先生が、狭い部屋で漁船が火事になるとどうなるのかを、詳しく話してくれたことを憶えている

から、この時も事故があって犠牲者が出たのだろう。

高校で早くに父親を亡くした女生徒がいた。漁師だった父は海で荒波にのまれ、行方がわからなくなってしまった。それで、魚を見ると死んだ父を思い出し、この魚の何代目かの親は、もしかして父を食べたかもしれないと考えると、そんな魚など食べることが出来ないと彼女は言った。

私が育った小名浜の家は海に面していたので、幼い頃から何度も遭難の話を聞いたり、海岸で溺死者を目撃したりした。

雨戸が風に鳴る夜更けに、事故を伝える大人たちが戸外で切れ切れにわめく声を、まるで物の怪の叫びのようにひとり寝床で聞いたことも、一度や二度ではない。海に対して憧憬のような親しみを感じないのは、これらの体験のせいだろう。

近所に、政美あんちゃんがいた。

津崎神社の祭礼の時、綱取地区で鳥居の前で撮った記念写真に、あんちゃんは写っている。鼻筋が通り、整った顔立ちで、映画スターのようにハンサムである。当時二十歳。きっとカッコよく神輿をかついだことだろう。私は小学一年生だった。この地区では、学校を出ると、男子は親のあとを継いでほとんどが漁師になった。目の前の入り江には砂浜がひろがり、豊饒な海にはたくさんの魚介類がいた。政美あんちゃんも伝馬船に乗り、海にもぐってアワビやウニを採り、季節が変わると漁船に乗り込んだ。

この祭礼の日から三年ほど経ったある日の朝、政美あんちゃんは、いつものように船に乗って行き、帰ってこなかった。二十トンくらいのニンベンの底曳船・第六瑞宝丸で、仲間七人とともに遭難したのである。後日、三人の遺体はあがったが、政美あんちゃんと他の人たちは、家族の元に戻ることはなかった。私の叔父は、政美あんちゃんと一緒の船に乗っていたことがあった。ひと月前に、あんちゃんは瑞宝丸に乗り換えて事故に遭ってしまった。政美あんちゃんはひとり息子だった。

その頃、私は、学校へ行く前に、毎朝ひとりでバケツを持って近隣の家々を廻って歩いていた。我が家で飼っていた豚の餌用の残飯を貰い集める手伝いをしていたのだ。茅葺き屋根の政美あんちゃんの家へも顔を出していた。

私が行くと、父親の勇おんちゃんは、「おお、来たかぁ」と元気な声を掛けてくれたものである。船が出るのがとても早いので、朝は政美あんちゃんと顔を合わせることがなかった。年が離れていたから、あまり話したことはないが、それでも竹藪のあるあんちゃんの家へ七夕用の竹を貰いに行くと、やさしそうに微笑んで根元から一本切ってくれたことを憶えている。

海難事故のあと、勇おんちゃんは毅然として言った。

「死んでなんかいるもんか！　助かって、どっかで生きて

るんだ」

かたわらで、母親のサトおばちゃんは強くうなずく。

「政美はな、そのうち帰ってくる……。きっと、帰ってくっと」

海でなぞ死ぬはずがない、と岩のような固い信念だった。まわりの人たちは、二人の一念に気圧されて黙って聞いているだけだ。

二人は毎日、仏壇に手を合わせ、海の神様にも熱心に祈りを捧げたことだろう。

「たったひとりの息子を、どうか、生きて帰らせてくんなせぇ」

だが、何の音沙汰もなく、無情にも月日が過ぎていく。期待と絶望と懇願と悲嘆との激しい葛藤の日々であった。

やがて、船主に諭されて合同の葬式をすませると、気持ちの整理がつくようになる。というより、敢えてつけたのだ。だから心の奥では、「きっと、どっかで」という思いが消えることはなかった。亡骸を目にしていないのだから無理もないことだ。

数年たち、まわりの人たちの意見を聞き入れて、親戚から同じ年頃の青年を養子に迎えた。ここできっぱりと息子のことはあきらめ、自分たちの老後と家名を残すことを考えたのである。

三人は家族として寝食を共にし、養子の彼はしばらく会社勤めを続けた。しかし、どういう事情によるのか、うまくいかなかったようで、また元の二人だけの生活に戻った。

私は相変わらずバケツを持って残飯を運んでいた。天気のよい朝には、陽光の降り注ぐ庭で、勇おんちゃんは、ラジオ体操の放送を聞きながら、ひとりで手足を動かしていた。顔には皺がふえ、鋭く生き生きとした目の輝きは失われて、動作も緩慢になっていった。

高校を卒業すると、私は東京に出た。

それから数十年たった。

二人は、とうに故人になっている。

あの茅葺きの家は柱が折れ、屋根が大きく傾いて、無残にも崩れ落ちている。青々と茂った雑草が、それを覆いかくさんほどである。

草の間に点々と赤まんまが幻のように咲いている。その花影を見つめながら、かつて聞いた次のような噂話を思い出して、私はたたずんでいた。

「政美が遭難してから、毎日、三崎の崖から海を見ていた、若ぇおなごがいたんだと」

受賞の言葉

西島雅博

福島県の太平洋岸の南端に位置する小名浜港（いわき市）には、現在、国際貿易港として、一万トン級の諸外国の船舶がいくつも繋留されているが、「きっと、帰ってくっと」は、その小名浜に、まだ長く白い渚があり、松林が続いていた頃の実話である。政美あんちゃんは生きていたら八十一歳。まだ現役で魚をとっていたかもしれない。

海に囲まれた日本列島には、海への感謝祭とともに、こうした悲話が無数にあったことだろう。

私が卒業した高校は、その後、移転してしまったが、当時は、松林のすぐ側にあって潮騒が聞こえていたものだ。

ところで、小名浜では、今は、魚市場に魚がほとんど揚がらない。

原発事故から二年数ヶ月経つが、風評被害などがあるため漁を自粛せざるを得ないのだ。いわきのはるか沖合で魚がとれたとしても、漁船は、油代をかけても、他の漁港へ運ぶのだから、おかしなものだ。

最近、長年住んだ東京を離れ、私はいわきに居を移した。

移り来てふるさとの山河眼にまぶし
原発事故の傷は癒えねど

いわきの復興のために、微力ながら、文芸方面で協力が出来れば、と願っているところである。

西島雅博

にしじま　まさひろ

1945 旧満州・新京（現／長春）に生まれる
72 早稲田大学文学部卒
78 独学で絵を描き始め、79 年以後、ヨーロッパやアジア、中近東、アフリカの国々を歴訪し、取材する
2006 「鳥葬」で第 29 回吉野せい賞を受賞
10 いわき市暮らしの伝承郷で企画絵画展
個展多数、日本表現派同人
著書に画文集「雲南の果てに」「中国紀行墨画集」「シーサンパンナへの旅」「チベット・ラダック墨画紀行」墨画集「若狭」墨彩画集「いわき」など

「チベット・ラダック墨画紀行」より

あの夜、僕たちは成し遂げた。

サトウ ユウ

平成八年八月五日付東京本社発行朝日新聞社会面の大きな見出しに、「遊漁船転覆　夜の海四時間」「伊東沖・子供ら八人全員救出」。

記事を読むと、東海汽船のフェリー「かとれあ丸Ⅱ」の乗客が「助けて」という叫び声を聞き、船を反転させて漂流者一人を見つけた、とある。

その記事の乗客は、僕だ。

八月四日午後七時半過ぎ、静岡県伊東港へ向かう「かとれあ丸Ⅱ」の二階甲板の右舷中央付近に、僕は会社の同僚と二人で立っていた。

神津島の行楽帰りだった。学生時代に僕がリュックを背負って伊豆七島を巡っていたときに知り合った神津島のオヤジさんの旅館に、会社の同僚と遊びに行くことは、夏の恒例行事になっていた。この時は僕を含めて四人で行った。あとの二人は浜松町の竹芝桟橋行きの午前便フェリーで帰っていた。僕たちは彼らを見送ったあと、伊東港行きの午後便に乗り込んだ。

あと三十分もすれば伊東港に着くはずだった。

僕たちは、多分、オヤジさん（愉快な人なのだ）にお世話になって旅が楽しかったこと、また来年も行きたいこと、などを話し合っていたと思う。

同僚がトイレに行くと言って、その場を離れたあと、僕は欄干に手をかけて、近づいてくる伊東の街並みや遠くに見える熱海の夜景を、ぼんやりと眺めていた。

真下に視線を移すと、陽の落ちた海は、昼間の青く爽やかなものから黒く禍々しいものに変わっていた。

僕は真下の海から進行方向沿いに視線を動かした。黒い海はフェリーの強烈な光に照らされていた。海がフェリーの尖端で二つに裂けているさまが見えた。その様子をしばらく見ていたのだろう。

僕はその光の中に人影を見た。グリコキャラメルのキャラクターのような姿。そして真下から「おー」という声が聞こえた気がした。

咄嗟に近くにいた人に尋ねた。数人に尋ねたと思う。

「今、海に人がいましたよね！」

見たという人は誰もいなかった。

一旦は、錯覚だったのだ、と自分を納得させようとしたのは覚えている。しかし瞬時に、伊東沖で水死体発見、の新聞の見出しが目に浮かんだ。その時に肚は決まった。僕は二階の甲板から階段を駆け下りた。そこに若い船員がいた。

「今、海の中に人を見ました、声も聞こえました！」と僕は訴えた。

すると、その若い船員は、分かりました、と、すぐに上司と見られる船員のところに僕を連れて行った。

僕はさらに強く訴えた。相手もそれを望んでいると思っていた。そして、分かりました、すぐに救助に向かいます、と、すぐさま反応してくれるはずだ、と。

ところが現実は違った。

「本当に見たんですか？」

四十歳代と見られる船員の目は訝しげに値踏みしていた。僕は熱狂から覚めた気分になり、対峙している船員をじっくりと見た。伸びたパンチパーマ、銀縁メガネの奥に潜む小さな瞳。吐き出される息は臭かった。その臭い息に言われた。

「あなた酒を飲んでるでしょ」

確かにその日、僕は同僚とビールを何本か飲んでいた。行楽なのだ。当たり前だ。

さらに四十代の船員は続けた。

「これが狂言だったら大変なことになるよ」

僕の頭の中に、コールタールのような不気味な海に一人取り残されて、遠ざかるフェリーを見送っている人の姿が浮かんだ。

「早く船を止めて、捜索に当たってください」

僕はひたすら訴えた。

相当なスピードで進むフェリーの二階の甲板から夜の海の中に人なんて見えるわけがない、しかもあなたは酒を飲んでいる。四十歳代の船員は高圧的な態度で僕を見下し続けた。

しかし僕は言い張った。

最後に四十歳代の船員の捨て台詞。

「これから海上保安庁に連絡する。そのあとであなたの言っていることが嘘だと分かったら、二千万くらいの損害賠償になるけど、それでもいいんだね」

僕は嘘なんて言っているつもりはなかった。ただ、絶対

に見たのか、と言われれば、一〇〇%の自信なんてあるわけがない。一瞬のことだったのだ。しかも、僕以外見た人がいないのだから。その時の僕は、今から考えるととても想像のつかない、熱い使命感を背負っていたらしい。

「いいから早く船を止めてください！」

名前、住所、年齢、電話番号を書かされた。しかも、勝手に下船しないように、とまで言われた。まるで犯罪者扱い。そのときの船員のキツネ目はいまだに思い出す。

僕は二階の甲板に戻り、椅子に腰かけた。

船内放送が流れた。乗客の方から海の中に人を見たとの訴えがあったので、当船は捜索に当たります。そんな内容だったはずだ。

船内は騒然となった。ふざけるなよ、の怒号も舞った。予定が狂うことに対する怒り。

僕は一人戦っていた。絶対に見たのだ。助けなければいけない。でも、仮に……。家内の顔が浮かんだ。母の顔が浮かんだ。見渡したが同僚はいなかった。

あとで分かったことだが、三十分くらい経った頃、

「いたぞ！」の声が上がった。

しばらくすると船内が、がんばれ、がんばれ、の大合唱になった。

僕はその輪に入る気にはなれなかった。皆が二階から一階になだれ込んでいったので、僕は立ち上がって誰も居なくなった欄干に移動した。下では大騒ぎ。

あとちょっとだ！　がんばれ！

サーチライトの輪の中に人が見えた。スイカのような模様の海水パンツをはいた男が泳いでいた。明らかに疲れ切った平泳ぎ。最後の力を振り絞るようにして、救助用に投げ出された白地に赤い線の入った浮き輪に手を伸ばした。

その後のことはあまり覚えていない。いつ同僚と会ったのか、どうやって家に着いたのか。ただ覚えているのは、下船するときに、最初に会った若い船員と目が合ったことだ。彼は出口の所で、乗客に到着が遅れたことを謝っていた。僕と目が合うと、何か言いたそうだった。一瞬のことだった。

翌朝、下田の海上保安部から電話連絡があった。フェリーに助けを求めた人は上原さんという方。そして上原さんからの情報で、まだ七名が海上に取り残されていることが分かった。上原さんは転覆した船から一人離れて泳いできたのだ。捜索をしたところ、船にしがみついている七名を見つけた。幼い子供がかなり水を飲んで一時は危ない状態だったが、今は容体が落ち着いている、とのことだった。

僕は置いた受話器をしばらくじっと見ていた。何かが引っ掛かっていた。新聞記事を読んだ後、その引っ掛かりはさらに強まった。

一か月後、伊東市で行われた第三管区海上保安部の表彰式に、僕は家内と出席した。夫婦でどうぞ、ということだった。

東海汽船からは「かとれあ丸Ⅱ」の船長が表彰されていた。僕はその様子をじっと見ていた。四十歳代の船員の姿はなかった。

帰りの電車で僕は家内に何かを伝えたかった。何かだ。でも、それを言葉にすることはできなかった。窓から流れる景色をぼんやりと眺めていたら、下船した時に出口に立っていた若い船員の顔を思い出した。汗で髪が額に張り付いていた。鼻の頭にも玉の汗があった。彼は忙しく動き回ったのだ。そして、上原さんの勇気。

僕たちは、たとえどんな試練があろうとも、成し遂げることができたのだろうな。そう思った。そうだ、間違いない、と。僕は初めてホッとした気分になった。

あの夜、僕たちは成し遂げた。

サトウ　ユウ

昭和39年（1964）東京オリンピック開催の年、岡山県に生まれる
法政大学文学部中退
広告代理店に勤務
この秋退社
現在、新しい環境に向けて晴れやかに活動中

受賞の言葉

サトウ　ユウ

会社の同僚から待合せ時間にかなり遅れると連絡を受け、とりあえず入った駅近くの本屋で、「エッセイ賞作品募集」の案内を目にしました。もうその時点で応募するのが当然な気になっていました。普段なら手にしない文芸誌からして、蓄積された感情が何らかの形をもって出たがっていたのでしょう。春に亡くなった同級生、昨年からの連綿と続く屈託……。

そして作品応募後、かなりの逡巡を経て、環境を変えることにしました。

新しい環境に向けて動いているさなかに、今回の優秀賞受賞の通知をいただきました。おかげ様で「ありがとう」の栄養をたっぷりと摂ることができました。いざ意気軒昂たれ！

動き始めれば思わぬ幸運がやってくるものだ、と「何とかなるさ」気分で見知らぬ土地に降り立つバックパッカーのような楽観の流れに、ワクワクと乗っていけそうです。本当にありがとうございました。心から感謝です。

心を守るために

浅井真理子

目覚めたとき、何かがおかしいと感じた。風邪や寝不足からくるだるさとは、どこか違う。起き上がることが出来ないほど身体は重く、手足には力が入らなかった。

なんとか手を伸ばして、携帯電話を取った。職場に休みの連絡を入れて、しばらくそのまま横たわった。そのとき私は、疲れが溜まったのだろうと思っていた。そして目前に控えた五月の連休で身体を休めれば、また元通りになると。しかしそれは、かなり甘い認識だった。

昼近くになると、徐々に身体を動かすことができるようになった。私は外の風にあたるために表へ出た。美しく晴れた日だったことを、今でもよく覚えている。木々の緑が日射しに反射してきらめいていた。私は吸い寄せられるように、木陰のほうへと足を進めた。

その瞬間、心臓が激しく脈打つのを感じた。息が上がって、呼吸が上手くできなくなった。私は驚いて立ち止まった。というより、それより先に足を進めることができなくなった。側にあったバス停の標識に掴まり、息を整えようとしたがなかなか治まらない。私は自分の身に何が起こっているのかわからず、混乱を通り越して恐怖を感じていた。息苦しさが続くようであれば、救急車を呼ぶべきかもしれないと覚悟した。

十分程経って、私は元の状態に戻った。そして亀のように少しずつ歩くことができるようになった。家に戻った後、どう過ごしたかは思い出せない。とにかく、医者に行く必要があるということだけが、そのときの私にとって明確な事実だった。

翌日は普段通り出勤し、退社後に医者のところへ行った。

症状を話すと、自律神経の不調だと言い渡され、最後に心療内科の受診を勧められた。私は唖然とした。心療内科なんて、自分と縁のないものだと思っていたからだ。私は心療内科の受診予約はせずに、薬だけ受け取って帰った。

その薬は自律神経失調症を患った人に処方される、ごく一般的な薬だった。しかし運が悪いことに、私の身体には合わなかった。薬を飲んで翌日出社すると、ふらふらして何も手につかなかった。真っすぐ歩いているかどうかさえ、確信を持てないのだ。私は思い切って課長に相談した。こんな状況で仕事を任されても、周りに迷惑をかけるだけかもしれない。すると、課長をはじめ周囲の人々がここ数週間の私の様子を心配していたことがわかった。産業医のところへ行ってほしいと課長に言われ、私は意識が朦朧としたまま社内の健康管理センターへ向かった。

産業医からは、ここ最近の体調についていくつか問診を受けた。その後、「必ず心療内科に行ってほしい」と言われた。頭がろくに働かない私は、反論する気も失くしていた。薬で身体が元の状態に戻るのなら、そういった薬を処方してくれるところに行くより他ない。産業医は課長をその場に呼び出し、連休中は仕事があるとしても私を出社させないよう願い出てくれた。そして課長も、それを快く引き受けてくれた。

数日後に訪れた心療内科では、たくさんのことを問診された。動悸や息切れがあるか、集中力が持続するか、食欲はあるか、眠れるか、死にたいと思うか。私はひとつひとつ、正直に答えていった。そして、答えるうちにようやく、自分は単に疲れが溜まっているだけではないことを自覚した。ここ数週間の私は確かに異常だった。突然涙が溢れてきたり、動悸で息が苦しくなることがあった。仕事に対する集中力はほぼないに等しかった。それら全ては身体から発せられていた危険信号だったのだ。私はそれに気付かずに、ここまで来てしまったのだと悟った。

医者は、うつ状態というものは脳の病気のひとつであると解説した。私は今までうつというものが「死にたいと思う人がなるもの」と誤解していたので、その話を聞いてようやく自分もうつ状態になり得る人間であるということが理解できた。「まずは一ヶ月、休んでみましょう」と言われ、私は診断書と処方箋を受け取った。薬局で抗鬱剤を処方され、その足で近くのカフェに入った。私は自分の置かれた状況を整理するために、時間を取る必要があった。

休職。それは私に喜びも安堵ももたらさなかった。むしろ、私を混乱させた。一体、何をして過ごせばよいのだろう。休むということ。それはただ横になって過ごせばよいわけではないことは、なんとなくわかっていた。

ひとまず、私は上司に電話して診断書の内容を報告した。それから両親に電話して事情を説明した。あまり驚かれなかったことが意外だった。あるいは、驚きを隠していたのかもしれない。とにかくその時ありがたいと思ったのは、誰も私を責めたり問いつめたりしないということだった。帰宅して診断書を会社に郵送してしまうと、もうやることがなくなった。

連休を終えて最初の月曜日、私はいつも通りの時間に目を覚ました。普段だったら朝食をとって化粧をして、慌ただしく出掛けて行けるところだ。しかし、会社へ行く必要はない。私はしばらく横になっていたが、落ち着かなくなって起き上がった。

私はまず家を掃除し始めた。フローリングや浴室を磨いてしまうと、再び何をすればよいのかわからなくなった。本を開いても内容は頭に入ってこなかったし、料理はすぐに失敗してしまった。手に上手く力が入らないからだ。私は床に落としてしまった食材を片づけながら泣きそうになった。

自分の身体が思っている以上に疲弊しているということは、日常生活のあらゆる場面で思い知らされた。何をしていてもすぐに疲れてしまうのだ。加えて、薬を飲み始めたこともあり、唐突に眠気が襲ってくることがしばしばあった。私はその度に横になり、同時に情けない気持ちでいっぱいになった。

私に残された、休むために出来ることはせいぜい近所を散歩することくらいだった。広い公園の中をゆっくりと歩き、時折ベンチに腰掛けて過ごした。公園のベンチに座るなんて、何年ぶりだっただろうか。そこから見えるものは道行く人と、風にさざめく木々だけだった。青々と茂る木の葉は美しく、いつまで見ていても飽きなかった。

ベンチに座り、ただ木々を眺めていると、私は自分の心に静けさが訪れたことを感じることができた。

心の静けさというものは、訪れたときに初めて、自分の心が静かでなかったことを認識できる。そして私の心は実際、静けさとは程遠かった。

入社してからの四年間、私はあらゆる場面において自分のベストを尽くそうとしてきた。私の周りには悩みを分かち合える同期達と、面倒見のよい先輩達がいた。そういった良好な人間関係は、自然と私に力を与えてくれた。私は積極的に、何か会社に貢献できることはないかと日々試行錯誤しながら仕事をこなしてきた。困難がないわけでは決してなかったが、それらを乗り越えることができたのはそういった人間関係に助けられてきたからだ。

それに加えて、社外での人付き合いも充実していた。積極的に他の業界の人達と交流する機会を見つけては、お互いの価値観をさらけ出し、刺激し合うことができた。入社して三年目には、社外で意気投合した仲間とシェアハウスを始めた。そこでもまた、自分がシェアハウスという形を通じて他の人間に価値を提供できないかと、躍起になっていた。私は自他ともに認める活発な人間だったのだ。

友人や同期からは「なぜそんなに、あらゆることに対して積極的に取り組めるのか」とよく聞かれた。私は「自分がやりたいと思ったことをやっているだけ」と答えてきた。しかし、理由はもちろん、それだけではなかった。

人生には浮き沈みがつきものであるように、私の人生にも、辛い出来事が度々起こった。そして幾つかの出来事が、私の原動力に関わっていたことは確かだった。

入社して二年目のことだった。ことあるごとに私を支えてきてくれた祖母が病死した。私は起き上がることができなくなるまで泣いた。祖母は小さな頃から私の味方だったのだ。学生の頃、私の進路について両親と対立したときも、祖母だけは私を守ってくれた。拠り所を失ったのだと思うと、心細さで会社に行くのがやっとだった。喪失感を抱えて生きるということは、私にとって初めての、辛く大きな課題となった。

それからしばらくして、長年想いを寄せていた人との決定的な別れがあった。その人も、祖母と同じように、私を温かく見守ってきてくれた人だった。しかし私が相手に対して恋愛感情を抱くようになると、友情に亀裂が生じ始めた。結果、私はその人との関係を失った。声を聴くだけで安心できるような存在を失うことは、私を言い様のない孤独感で満たした。

そして、震災があった。経験したこともないような激しい揺れと、直後に目にした被災地の中継映像。あれを観た人間なら誰しもが感じたであろう、圧倒的なまでの無力感。巨大な自然の力の前で、なす術もなくただ流されていく街と人。そして直後に発生した原発事故がもたらした甚大な被害は、私がなんとかして描こうとしていた未来をひっくり返してしまった。生きる場所を変えるべきか、不安定な社会の中で自分はどう生きていくべきか、不安や不信を抱えながら、私は常に考えるようになった。

これらのことが私の心に残していった傷は、何かに打ち込むことで忘れていくことができると考えていた。だからこそ私は目の前の物事に対して、過去を振り返る暇もないほど、全力で取り組んできた。時折涙が込み上げてきても、私はそれを必死で振り払った。

しかし、心に残った傷は、何かに打ち込んだりすることで消えるものではなかった。悲しみは、私の中で生き続け

ていた。そして、体調を崩すという形で再び私の前に現れたのだった。

私はそのことを、大きな氷が溶けていくようにゆっくりと理解しながら、休むことに慣れていった。薬の効果が得られるようになってからは、出来ることが少しずつ増えていった。

休み始めにほとんど身体を動かさなかったせいで体力が衰えてしまい、私は友人の勧めでヨガを習い始めた。そこで、呼吸することの大切さを知った。また、身体を動かすところどころが凝っているのを感じた。それはまるで、今まで蔑ろにしてきた負の感情が堆積して、心だけでなく身体まで硬くしてしまったかのようだった。ヨガを続けるにつれ、私の身体はほぐれていった。そして心も同様に、柔らかくなっていくのを感じた。

他にも幾つか始めたことがあった。ぬか漬けと野菜の天日干しだ。自分が食べるものに気を遣うことで、私は自分の身体を大切にしていると実感できるようになった。今まで鞭を打ってきた分、今は労るときなのだと思い、出来る限り健康な、けれども手間をかけすぎることのない食事を作るようになった。

しかし料理をする気が起きないときは、無理せずに外食をした。そのときは一緒にいて安らぐことのできる友人と、延々と語りながら時間を過ごした。以前は多くの人と共に食事する機会を作ることが多かったが、休み始めてからは気の置けない友人と、ごく少人数で会うことが増えるようになった。そういった時間は、私にとって何よりの休養となった。

療養は順調に進んでいるかのように見えたが、夏を迎えた頃に思いもよらないことが起きた。眠れなくなってしまったのだ。夜ベッドに入っても、一向に睡魔が訪れない。目を開けたまま天井を眺めていると、そのまま朝を迎えてしまうことが何日も続いた。私は入眠作用のある薬を追加で飲むようになった。

思い当たる原因は人間関係だった。ある親しかった友人と、連絡がつかなくなってしまったのだ。私は自分の言動に問題があったのかもしれないと悩み続け、周囲にいくら自分に非はないと言われても、そのことが頭から離れなくなってしまった。今思えば、過剰な反応だったのかもしれない。しかし当時の私は冷静に自分の置かれた状況を考えられるような状態ではなかった。

仕事を遠ざけることはできても、人生を遠ざけることはできない。私はそう思い知った。他人と関わることを望めば、喜びを得られると同時に、悲しみを得ることだってある。そして自分ひとりで生きていけるほど強くなかった私は、ただ傷つくことしかできなかった。薬の効果が得られるようになっても、悪夢にうなされる夜がしばらく続いた。

悪夢から目が覚めると、大抵の場合は明け方だった。静かで薄明るい部屋の中で、私は終わりのない戦いに身を投じてしまったかのような果てしなさを感じた。眠れない明け方の一分一秒は、ぞっとするほど長かった。夏の終わり、ようやくぐっすりと眠れるようになった頃には、全てがどうなってもいいと思ってしまえるほどに安堵した。

不眠から立ち直ると、穏やかな日々はあっという間に過ぎていった。そして、冬の終わりにとある節目を迎えた。それは二〇一三年三月十一日、震災から二年経った日のことだった。私は例の時間が近付くにつれて、当日のことを思い出していた。免震構造のビルにある職場は、立っていられなくなるほど揺れた。パソコンのディスプレイが倒れ、棚に飾ってあったトロフィーは床に落ちた。引き出しの中の書類が飛び出し、散乱した。私は机の下にもぐったとき、生まれて初めて、恐怖で身体が震えた。そこまで思い出してから、あることに気がついた。

被災地に比べれば、私は何も失っていない。だから泣いている場合ではないし、自分にできることをするべきだ。これは当時の私がよく自分に言い聞かせてきたことだった。もっともらしい考え方のように見えるが、こういった思考は傷ついた自分自身を癒さないまま、あたかも正常な心を取り戻したかのように錯覚してしまう。

傷は確かに存在している。一人の人間が、何かによって深く悲しみ、心に傷を負うということ。それは誰かと比べたり、正論によって片づけられてよいものではない。そこに存在している痛みに目を向け、時間をかけて癒すことが必要となる。

身体の傷は放っておいて治るものもあれば、処置が必要なものもある。心の傷も同様だ。時間と共に癒えていくものもあれば、そうでないものもあるのだ。自分の心に負った傷と向き合い、そのために何をするべきか、考えなければならない。

誰かに話すこと。慰めてもらうこと。抱きしめてもらうこと。文字に起こすこと。気が済むまで泣き続けること。旅に出ること。これらは傷を負った心のために、行われるべきことだ。例え他人に自分の傷ついた心を受け入れてもらえなくても、自分は自分の心を守るために、受け入れなければならない。そして自分の心と正面から向き合い、傷を認め、癒すことができてはじめて、人間は本当の意味で強くなることができる。

そう考えるようになるにつれ、私は今まで自分の心に受けた傷を放置し続けたのだと思い知らされるようになった。それまで、心の傷に目を向けることは、非生産的で悲観的

で、悪いことのように思っていたのだ。しかしそれは、自分の心を蔑ろにする行為だった。前向きで生産的なことばかりするのが人間のあるべき姿とは言えないし、自分の心を見つめるというのは、人間としてごく自然な営みなのだ。自分が起こす行動については、その後に考えても遅くはない。

周囲を見渡せば、働き盛りの友人達がいる。本屋に行けば、効率的に働き、社会で生き残るための本がずらりと並んでいる。しかしそれと同時に、うつ病患者が年々増加しているニュースを耳にする。会社の知り合いのうち何人かは、私同様、休職することになったと聞いた。私たちはどこでどのようにして、歩み続ける足を止め、ただ疲れ、悲しみに暮れることを許されるのだろう。何もすることのない時間の中で、自分自身に思いを馳せるにしては、世の中は少し、忙し過ぎるように思えてならない。

休職してから一年が経とうとしている。私の住む街は再び緑で溢れ、爽やかな風が吹くようになった。医者曰く、まだ私は寛解に至っておらず、自分が今後どう生きていくか考える段階にもいない。しかし自分がどう生きるかとは別に、この社会で自分の心を守りながら生きていく方法について、私は日々考えている。幸い、私は文章を書くことで、自分の心と静かに向き合うことができることに気がついた。そして友人たちと過ごす時間は、どんな薬よりも私にとって良い影響を与えてくれている。

今後も恐らく、ゆっくりと浮き上がっていく過程で、あらゆる困難に直面するだろう。しかし今だからこそ私は、それについて概ね楽観的に捉えている。自分の心を守りながら生きていくことが、何よりも大切なことだと理解できているからだ。そして願わくは、自分と同じ薬を飲んでいる人達も、それぞれが心を守りながら生きていけることを、祈るばかりである。

受賞の言葉

浅井真理子

ありのままを見つめ、ありのままに感じ、感じた自分をそのまま受け入れるということ。例えそれが、自分を抑えられなくなるような感情を呼び起こすとしても、それは人生から贈られたギフトである。

エッセイを書いているうちに、この事実に気付くことができました。そしてエッセイを書き終える頃には、自分自身を脇において時代の大きなうねりに身を投じている人達に、それを伝えられたらと願うようになりました。このような形で世に出せることを心から嬉しく思っています。ありがとうございました。

浅井真理子

あさい　まりこ

1986年生まれ

東京都出身

慶応義塾大学総合政策学部卒業後、会社員として勤めながら、日々を題材にしたエッセイを執筆

受賞作品は本作品が初

第9回 文芸思潮エッセイ賞 優秀賞

空白の通知表

城戸則人

明治生まれの母は字を読むことはにがてであった。

隣からくる回覧板を読んでくれとか、選挙の立候補者の名前を聞いたりしていたことを、今にして思えば字はよく読めなかったのだと思う。

転居のさいに、これまで埃にまみれた茶碗や、母が丁寧にしまっておいた土産の包み紙なども捨ててしまった。

母は手にふれたものはなんでも大事に物置の隅や押し入れに保管しておいた。

特に印刷物は自分が理解できないなりに大事に取っておいたものと思う。

父はよく「お前は馬鹿だ」と母を叱っていた。

母のためることへの執着も父への意趣返しだったのかもしれない。

母の執着したものすべてを捨ててしまった。

転居して落ち着いたものの、新しい家に馴染めなくて、どこかよそよそしく自分の家ではない気がしていた。

捨て去ったあとのむなしさもあったのかもしれない。

家が、自分の体に少しは馴染むような気がして、運んでおいた荷物を解くことにした。

荷物といっても、古いラジオやインクの出ない万年筆、けずりかけの鉛筆などで、母が仕舞っておいた品物とあまり違いはない。

あとは兄達の遺した本が少しばかりであった。

母の保管していたなかにぼろぼろになった封筒があった。

手に持てば砕けそうな封筒であった。

赤茶けた封筒のなかをおそるおそる覗くと、丁寧に折りたたんだ書類らしきものが見えた。

母の秘密を知るものでもあるかと、取り出してみると、自分の通知表であった。

小学校一年生から中学校一年生までの七通の通知表であった。

「えらいものが見付かったな」と私は自分のはらわたを見

るような気分であった。

私が小学校一年生になったのは昭和二十年四月一日である。

終戦の年であった。

藁半紙に謄写版印刷されたみすぼらしい通知表が昭和二十年度の通知表であった。

呉市立鍋国民学校、第一学年修了と表紙にあった。

学業成績表には第一学期、第二学期、第三学期とあり、評価欄の科目は国民科（修身、国語、国史、地理）理数科（算数、理科）体錬科（体操）芸能科（音楽、習字、図工、工作、裁縫）実業科（家事、農業）になっている。

なぜか、第一学期の評価には「防空事情ノタメ査定不能」の文字が書き込まれていた。

出欠日数は一学期の四月は病欠3日、五月は事欠1日、七月は7日と欠席日数が記入されていた。

あの日のことが出欠日数に影響があったのか。

私の記憶の断片の不足をみたそうと資料を取り出してみた。

昭和二十年という年を思い返すと、爆撃音と身も心も張り裂けそうな飛行機の音と石畳の上に大八車を投げ捨てたような機銃の音が乾いた空気を切り刻んでいた。

待避壕に入るとかびのにおいで呼吸ができなくなるようであった。

警報解除になれば空腹のあとに恐怖感がいつまでも続いた。

必死で逃げまわったにしては汗はかかなかった。

私のなかに澱（おり）のようにたまっている昭和二十年のことをはっきりさせるためにも通知表をゆっくりながめるしかない。

通知表にある出席状況に疑問を持った。

「防空事情ノタメ査定不能」に関連しているものと考えたからである。

昭和二十年三月十九日。呉軍港を中心に、アメリカ軍艦載機約３５０機による空襲。

五月五日。Ｂ29約１２０機、広地区海軍工作庁を中心に爆撃。

六月二十二日。Ｂ29約１８０機、呉工廠を中心に爆撃。

七月一日。Ｂ29約１００機、夜半より翌二日早朝にかけて呉市を空襲、市街地の大半を焼失。

七月二十四日。アメリカ軍、艦載機約８７０機呉軍港内艦艇を中心に爆撃。

七月二十八日。アメリカ軍、艦載機約９５０機およびＢ29・Ｂ24約１１０機、主に呉軍港内艦艇を爆撃。

これが、私が住んでいた場所付近の戦闘状況である。

私が小学校一年生に入学する以前から、爆撃が続いてい

たことになる。

出席状況の四月の病欠３日は、母の証言によれば担任の若い女教師にひどくしかられ、母が抗議に行ったことと関連がありそうだ。

しかられて三日ほど休んだにちがいない。

私自身、そんな記憶はない。

七月の七日間の事故欠席については資料の年表にある七月一日、二十四日の爆撃のあった日前後であろう。

私の頭のなかには、年表を追ってみてもあの恐怖におびえていた日が、どれがどれであったものか全く理解できないのである。

爆撃がいつ始まって、いつ終わったものかも整理できないでいる。

かって住んでいた警固屋（けごや）は北には広島市内方面が望まれ、東は一つ峰を越して呉海軍工廠があり、呉市街が連なっていた。

西は早瀬の瀬戸と音戸の瀬戸が呉湾の調節装置のような役割を果たしていた。

音戸の瀬戸は平清盛の伝説がある。

音戸の瀬戸の開削工事が一日で終わらないので太陽を招きかえしたというものである。

今年三月「日招き大橋」として第二の橋がかかった。これまでの橋と二つの橋が何事もなかったように朱の輝きが潮の流れに映えて美しい。

家からすぐの場所から海が見えた。軍艦「青葉」も真下に見ることができた。

資料によれば、七月二十四日午前六時ごろ第一波から午後四時まで継続的に、午前中４０機、午後５０機の艦載機攻撃を受け、命中弾１、至近弾１、５機撃墜。

七月二十五日にもグラマン編隊５機来襲し、七月二十八日午前七時から午後四時まで艦載機延べ２００機、Ｂ24、１０機の攻撃で１００キロ爆弾８発、２００キロ爆弾１発、至近弾多数を受けて大破着底した。

資料の数字を見てもはっきりと浮かんでこないものの、「青葉」の最期であったようだ。

至近弾を受けたあとと思われるが、傾いた甲板に兵隊が整列していたのをかすかにおぼえている。その後のことは分からない。

藁半紙のみすぼらしい通知表の第一学期の空白の評価欄をながめてみた。

「防空事情ノタメ査定不能」の文字が爆撃の音と一緒になって迫ってくるようであった。

昭和二十年の国民学校一年生一学期が「査定不能」として空白であることは先生も爆撃に逃げまどっていたことであろう。

「防空事情ノタメ査定不能」の評価を下したのは全学年であったろうか。

考えれば考えるほど疑問がわいてくる。

他の地域の生徒も「査定不能」と書き込まれたのだろうか。

もう一つ、ひどくしかられ学校に行かなかったのは一学期のことである。担任は若い女教師であったと母親から聞かされていた。

しかし、通知表の担任者印が女性教師ではなく近所の知った男性教師の印が押されていた。

至近弾で大破した「青葉」は静かな海に船体を傾けていた。大音響も聞かれなくなった。

逃げることに専念していた日常から静かな周囲の日常に変化すると、自分自身の身の処し方の判断ができなくなった。

いつでも逃げられる準備はおこたらなかった。

条件反射として、逃げることは身にそなわっていたのかも知れなかった。

静かな日がいつまで続くのか。

夏休みになったこともはっきりとした認識はなかった。

夏休みには宿題でもしなければいけないものと思っていた。

やけにセミの声がやかましい日であった。

日差しが強い朝、近所へ遊びに行った。

遊び相手はいなかった。

仕方なく家の方向へ一歩ふみだしたその時、白い光が空をはしった。同時にびりびりと音がした。

一目散に家に走り込んだ。

いつもであれば後に飛行機の音や腹の底にひびく音が続いたものであった。

その日は、それっきりであった。

近所の大人達が見ている方向に目をやった。

大きな雲であった。

八月六日。父と母は大きな雲を見て兄が広島の部隊にいたのであわてて出て行った。

母が字の読めなかったことに感謝すべきか。

丁寧に保管されていた私の通知表を見て忘れていた事を想い出してしまった。

「防空事情ノタメ査定不能」という文字が再び書かれることのないように願うばかりである。

私は自分のはらわたのような薄汚れた通知表をそっとものの封筒にもどした。

吐き出しそうな痛みを伴った感謝を母に。

参考資料
呉空襲記（中国新聞社）
呉の歩み（呉市役所）

受賞の言葉

城戸則人

歴史への認識は最近である。自分が老いた証左かもしれない。なんでも仕舞いこむ習性のあった母の史料に目覚めたのも、老いがもたらしたものか。

母のおかげでゴミにはさまった自分の通知表を見付けられた。内容を見れば当時の世相もはっきりと浮かんできた。父は何故ゴミを残しておいたのか、母をしかりつけている姿が目に見える。

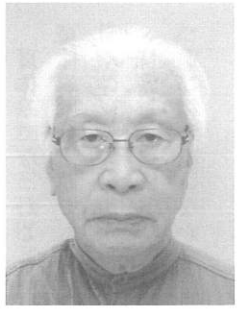
通知表に記入されている査定不能に至る背景はどのようなものだったのか。

私だけの目盛をどこかに刻みこむ作業はこれからも続くものと漠然と考えている。

選考委員の皆さんに感謝いたします。

ありがとうございました。

文学のますますの隆盛を願いつつ。



城戸則人

きど　のりと

1938（昭和13年）呉市に生まれる

57 呉市役所に就職

99年4月呉市立中央図書館長定年退職

83　第15回新人登壇第二席（中国新聞社主催）

我が国には再びない中国北京での
少年の目から視た植民地生活の反省と回顧録

蘆溝橋　定価 1300 円（送料込）

東山 昇 著　**遠足の頃**　千葉日報社刊

注文先　アジア文化社　※御希望の方はアジア文化社に御連絡下さい。

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13　TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

E-mail　asiawave@qk9.so-net.ne.jp

文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙
詩銀河 8

THE ESSAY COSMOS

第９回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第９回エッセイ賞の作品を集めた
百花撩乱の人生の様々な相
エッセイ宇宙が豊かに広がります
現代詩賞作品・イラスト賞作品併載
2014年１月末発売予定

1200円＋税

アジア文化社

ご注文はアジア文化社まで
TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848

第9回 文芸思潮 エッセイ賞 優秀賞

永久（とわ）の別れ

沼 俊

頑健を自認していた横堀さんが二〇〇九年の十月に癌と宣告された。そのことを感情を押し殺してメールに書いてきたが、主治医から告げられたときのショックは隠しようがなく、読む仲間たちに衝撃を与えた。

平静を装い、いつも通りの生活のペースを続け、雨にたたられない限り自転車のトレーニングを欠かさなかった。

「春には九州横断のツアーを開きます。その時には皆さんも参加してください」

と延岡から企画書を送ってきて、夏のシルクロード遠征を楽しみにしている言葉も書き添えてあった。

それが翌年一月の延岡でのシルクロード写真展の時には車椅子に頼らなければならないほどの生活になり、応援に駆け付けた仲間には、（これがこの間までの横堀さんか）と驚かせるまでに衰弱していた。そして、桜の花が散るころ、それに合わせるように旅立ってしまった。

二〇〇八年に標高一八〇〇メートルのトルコ高原を走っているときのことであった。見る限りの一直線の下り坂を一列になってスピードを上げているときに、しんがりを走っていた横堀さんがハンドルを石に取られ、もんどりうって転倒した。

自転車は宙に舞って崖下に吹っ飛び、彼の身体は路肩を飛び越して同じように宙に舞った。衣服は破れて血まみれになり、帰国後はリハビリに明け暮れる生活になった。

シルクロード走破に十年近くも挑戦してきたベテランに、

「この次は絶対ダメです」

と医者の忠告は厳しかった。

「シルクロード病にかかってしまい、それだけは……」

七十歳までにローマまで完走するのだと、医者の言葉にはガンとして耳を貸さず、二〇〇九年の夏も一千キロを走破した。

（ドナウ河を見るまでは）が口癖で、（その先にローマがあるのだ）と周囲にも語り、この年とうとうブルガリアまで走ってきた。気分が高揚するとハーモニカを取り出し、

「これが何と言っても一番だよ」

（疲れた身体を癒してくれるんだ）とドナウの漣（さざなみ）を夢見るように吹いた。

「どうだ、いいメロディだろう。まるで波に身を任せているみたいだよ」

「ドナウ河の水をこの手で掬うのが、俺のシルクロードの旅の夢なんだ」

そう言って、酔いが回ると足でタクトを取り、何度でも吹いて聞かせた。

二〇一〇年の八月五日を、私たちはハンガリーのバヤで迎えた。ホテル・デュナには前日遅く着き、休暇となったこの日には自転車の整備などで思い思いの時間を過ごした。太陽が頭上高くまで昇ったころに、

「ドナウ河までには二キロほどあるが、午後はそこまで歩くことにしよう」

と仲間の内藤さんが告げて回った。この提案には裏があって、

「ドナウ河まで足を運び、そこで横堀さんのセレモニーをやろう」

と東京を発つ前に申し合わせていたのである。

「やっと着いたよ」

「ほうら、ドナウの本流が目に前に広がってる。これをどうしても見たかったんだろう？」

懐から取り出した写真を草の上に置き、そばに腰を下ろして私はそう話しかけた。緩い傾斜の土手の先が波の打ち寄せる水際に吸い込まれ、キラキラ光る水面がその先に広がっているのが見えた。

「見てごらん、うねるように水が流れてる。対岸まで声が届くかなあ」

私はそう呟き、

「ほんとなら、今頃は並んで君と乾杯していたはずなのに……」

と続けると、（うん）とかすかに頷いたように見えた。（ムムッ）私はどきっとし、思わず目をむいて写真に顔を寄せた。（気のせいじゃないか）そう思いながらも（そうか、やっぱり同じ考えなんだな）と私は自分に言い聞かせた。

風が私の顔を撫でていき、立てかけていた写真をぐらりと横に揺らし、横堀さんの顔も同じように揺れた。

「いまのは風のせいだったよね」

写真をもとの位置に戻し、（頷いたんじゃないよね）と再び彼に話しかけた。

「せっかくドナウのほとりまで来たんだ。今日はじっくり見ておこうよ」

私は言葉を続けようとして、声が出ないことに気が付いた。

「涙もろくなっていかんなあ」

私が目で彼に話しかけると、横堀さんの顔がにじんできて、目の前がかすんできた。

「これから、ドナウに君の身体を浸してあげようと思ってるんだ」

前かがみになって語りかけようとして、危うく写真にのしかかりそうになった。

「ほんとだよ」

「ドナウの水に思い切り浸ってもらおうとみんなと話し合ってきたんだ」

うまく言えなくて口ごもっているうちに、また目がうるんできた。

「日本から預かってきたものがあるんだ」

（大事に抱えてきた人がいるんだよ）と言おうとしたときに、その内藤さんが近づいてきた。

細くて小さい灰色の塊を押し戴いて、私はしばらくそれに目を落とした。それは軽くて、あの頑健な横堀さんのものとはとても思えなかった。

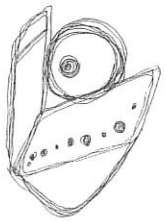
（これが？）私には不思議な気がした。手のぬくもりがこの塊に伝わってくれたらなあと心の中で祈り、（これが念願のドナウだよ）と足が濡れるのも構わず、私は水際まで降りて行った。そして、その手をドナウの水にひた浸そうとした。

小さい波が私の指先を濡らし、もう少し大きい波がそのすぐ後にやってきて、指のずっと上まで寄せてきた。灰色の塊はその波に誘われふわっと浮き、それから引く波にさらわれ私の手を離れていった。

ゆらゆらと揺れ、二度、三度と回転したように見え、それからすーっと水流に呑まれていった。

それが一瞬止まったように見え、私の目の先で別れを惜しんでいるようにもう一度浮き上がり、きらきらと光る水面と交錯し、それからすーっと横に流れていった。

（そうか、元気でな）私の目はもう追うことが出来ないくらいにじんでしまっていた。



受賞の言葉

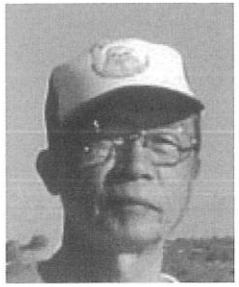
沼　俊

思いがけない受賞の報に驚いております。

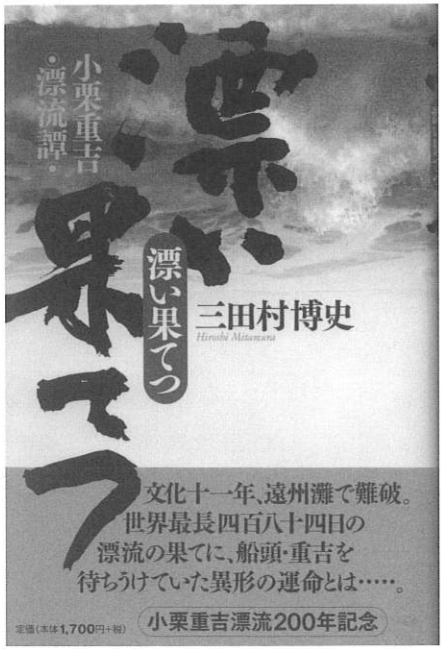
宮仕えの生活を終えてからは各種のボランティア活動にのめりこみ、これまでを支えてくれた社会に恩返しをすることを心がけてきました。

七十五歳を迎えて一念発起、心に閃く事柄を折りに触れ書き留めておくことを思いたち、挑戦を始めた矢先の受賞内定になりました。

今回の受賞はこれからの人生に喩えようのない励みになることは間違いありません。心から感謝申し上げます。



沼　俊

ぬま　しゅん

1937　埼玉県生まれ
61　早稲田大学第一政経学部卒業
同年日産ディーゼル工業（株）入社
97　日産ディーゼル工業（株）退社
知的障害者ボランティア活動
2012　シルクロード走行 15000km 走破
荒川河川敷の環境ボランティア活動
植林ボランティア活動等